

# 同時バイリンガルの言語識別能力に関する 縦断的実証研究

—— 一語発話期におけるコードの切り替え及び同義語 ——

奥 田 久 子

(受付 1997年 5月 30日)

## 1. はじめに

### 1.1 研究の背景

国際化の趨勢に伴い、早期英語教育を望む児童・家族、日本在住の外国人家族の子供、海外在住の日本人児童生徒の数はいずれも急増している。もはや、日本でもバイリンガル研究は避けて通れない課題であることに間違いはない。幼児期に日本語を第一言語（母語）として習得する場合の研究には、例えば、野地潤家『幼児期言語生活の実態（I～IV）』等があるが、バイリンガル児の言語習得・中間言語能力及び、心身への影響に関する学問的な解明は日本では殆どなされていない（奥田・奥田，1995）。従って、バイリンガル、早期英語教育等の言葉がマスメディアでも盛んに見聞され、多くの育児者や教育者の関心事でありながら、その分野での理論的な根拠を提供し得る研究・文献は著しく限られている。国内のみならず、海外からも、日本での研究とその知見の提供が期待されている。

そうした背景を踏まえ、筆者は、同時バイリンガル（Simultaneous Bilingualism）のケーススタディーとして日英両言語同時習得児（以後 T と

---

本研究は、文部省科学研究費（平成7年度補助金一般研究（C）萌芽研究（課題番号07680315））の助成を受けた。なお、語形変化が現れる3歳時、文法的な文の生成が可能になる4歳時までのコードの切り替えに関する研究は、文部省科学研究費（平成9年度及び10年度補助金複合領域萌芽的研究（課題番号09878048））の助成のもとに継続して行う。研究に当っては、George M. Landon 博士及び、Kyoko Saegusa Landon 教授に多大な指導をいただいた。ここで改めて厚く御礼申し上げたい。

呼ぶ)の言語発達の全体像を明らかにする縦断的実証研究を行ってきた(奥田, 奥田, 1993)。本研究は, その一環として行ったものであり, 同時バイリンガル児の言語の識別能力を解明することを目的とする。その方法としては, 特に重要な意味を持つ一語発話期のコードの切り替えに注目し, 日英両言語にまたがる同義語の分析を縦断的に行った。

## 1.2 コードの切り替え及び言語の識別能力

同時バイリンガルの言語表現の顕著な特徴に, コードの切り替え (Code-switching, もしくは, Code-mixing) と呼ばれる現象がある。日本では, 成人, 子供の別なくコードの切り替えに関する研究は皆無に等しいが, 欧米では, 興味深い研究が数々所見される。しかし, 研究対象者の年齢によりかなりの開きがあり, その多くは成人を対象としたものである。子供の場合には, さらに片寄りがあり, ほとんどが文の生成能力が発達した時期以降の研究である (Auer, 1988; Bokamba, 1989; Halmari & Smith, 1994; Kwan-Terry, 1992; McClure, 1977; Nishimura, 1989; Poplack & Meechan, 1995; Zentella, 1990)。発話材料の収集が困難な乳幼児期・一語発話期からの言語習得, 中でもコードの切り替えに関する研究は著しく限られている。Volterra & Taeschner (1978) により, 同時バイリンガル児の単一言語システム説 (Unitary system hypothesis) が提唱されてから20余年になる。その間に複数言語システム説も含め, 興味深い文献は見られるが十分ではなく, 今後の研究に期待がかけられているのが現状である。特に, 単一言語システム説に相對する複数言語システム説は, 一応の支持を見てはいるが, その説を確固なものとするためには, 一語発話期の詳細なデータに基づく研究の集積が欠かせない (Ochus & Schieffelin, 1995, p. 90)。乳幼児期の言語習得研究は, データの収集の面からも容易ではないが, 積極的に取り組む必要のある課題である。

従って, 本研究は, 不足している分野での研究に貢献するものとして, 位置付けられよう。特に, 本論では, 研究対象者の一語発話期の日英両言語

における同義語の詳細を社会言語学的な観点から分析し、同時バイリンガル児の言語の違いの識別能力を解明しようとするものである。

### 1.3 研究対象者

本研究の対象者 T は、日本語（母語）と英語（第二言語）を同時に習得するバイリンガルとして育てられてきた。T に対する家庭内での言語入力には、乳児期から一親一言語（One-person/one-language input）の方法を採用することにより、T の両言語への接触を可能とした。入力の言語の役割分担は、基本的には父親（D）が日本語、母親（M）が英語としたが、両者の母語は日本語であり、両者とも英語は外国語としての習得者（継続バイリンガル）である。T は、成長過程において英語圏（米国、カナダ、英国）で短期間（1～6 ヶ月）ずつ過ごす機会を得たが、それは、4 歳以降のことである。従って、本研究の対象となる 2 歳までの居住は常に日本であり、T を取り巻く社会の言語は日本語のみであった。

### 1.4 研究資料

同義語を T の発話から抽出するために使用した資料は、ほぼ成人の言葉に近い言葉の産出が可能となった 8.9 ヶ月（0;8.9）から二語発話が増え始めた 2 歳時（2;0）までに収集したものである。分析に必要な発話のデータは、以下の資料から抽出した。①日常生活の中で T が話している機会をできるだけ多く捉え録音したカセットテープ（46分 6 本、60分 6 本、90分 7 本、合計 1,266 分）、② T の発話が多い食事と入浴場面の 8 ミリビデオの録画テープ（合計 420 分）、③毎日 T の心身や言語の発達の様子を詳しく M（母親）が記録した育児日誌、④週日 T が通った保育園の保母により T の様子がほぼ毎日記録されている連絡帳。録音テープは、全てを丹念に文字化をしたが、それに際しては、日本語の部分は筆者を含め日本語の母語話者 3 人が、英語の部分は筆者の他に英語の母語話者 2 人が行った。一語発話期の発音は明朗ではない。従って、データの正確度を高めるために、必要な

箇所の発話は数十回も繰り返し聴き、書き取る他に、第三者や専門家による確認作業を必要とした。

## 2. コードの切り替えに関する先行研究

### 2.1 成人の同時バイリンガルによるコードの切り替えに肯定的な研究結果

日本ではバイリンガル児の言語発達研究は、上述した通り皆無に等しいが、欧米では、単一言語話者 (Monolingual) の言語習得に関する研究に比べるとはるかに少ないとはいえ、バイリンガルの言語能力の発達とその特徴を明らかにする研究が早くからなされ、その成果が、第二言語もしくは外国語教育に生かされてきた。コードの切り替えの研究は全体的に多くはないが、文の構成能力が発達した年齢以降の研究、中でも、複数の言語が使用されている生活環境の下で、成人のバイリンガルが、話し相手によりコードの切り替えを行いながらコミュニケーションを達成していく過程を明らかにするための研究は、子供を対象にした場合と比較すると、量的に格段の差が認められる (Auer, 1984; Blom & Gumperz, 1972; Genesee & Bourhis, 1988; Gumperz, 1982; Halmari & Smith, 1994; Heller, 1988; Kwan-Terry, 1993; McClure, 1977; Meyers-Poplack, 1980; Nishimura, 1995; Romaine, 1989; Sankoff, 1972; Scotton, 1993)。

これらの文献は、社会言語的な観点から記述されたもので、いずれも成人の同時バイリンガルによるコードの切り替えを肯定的な立場からとらえている点で共通している。例えば、成人のコードの切り替えは、知的な能力に基づき系統的に行われるものだとの見解である。そして、各論文は、成人のバイリンガルの知的な能力、つまり、複数の言語を聞き分け、それらの言語に対する周りの人達の言語能力や価値観を察知し、時、場所、相手との関係、話題等さまざまな状況に応じて適切に言語の選択をしていく能力を解き明かしている (Sridhar & Sridnar, 1980)。更に特筆すべき点は、成人の同時バイリンガルの文法能力に関しても同様に、肯定的な立場に立った上での研究が進められているということである。例えば、成人のバイリ

ンガルがコードの切り替えを行ったとしても、いずれの言語の文法規則も犯すものではない、との前提である (Poplack, 1979)。

## 2.2 同時バイリンガル児のコードの切り替えに対する二つの異なる説

### 2.2.1 単一言語システム説

#### 2.2.1.1 複数言語情報の混存

成人のバイリンガルのコードの切り替えの研究が、上述の肯定的な前提の上から出発しているのに反し、子供の場合には、その前提自体が研究の対象となっているところに、大きな違いがある。同時バイリンガル児によるコードの切り替えは、例えば、音声・音韻、文法、語彙・意味や語用論的な面等全てにわたり認められるということがこれまでの研究で明らかにされてきたが (Genesee, 1988, p. 69; McLaughlin, 1984, p. 89)、特に、文の構成能力が発達する以前に見られるコードの切り替えについては、二つの異なる見解がある (Hamers & Blanc, 1983, p. 97)。その一つは単一言語システム説である (Klaisen & Hayashi, 1990; Redlinger & Park, 1980; Taeschner, 1983; Vihman, 1985; Volterra & Taeschner, 1978)。

この説の代表的な研究として見なされる論文 (Volterra & Taeschner, 1978) の論点は、コードの切り替えが起こる理由は、同時バイリンガル児に内在する言語システムは一つしかなく、その中に複数の言語情報が雑多に取り込まれからであるとする。従って、複数言語の違いを識別する能力を持たない同時バイリンガル児によるコードの切り替えは、言語の混乱を意味するものであると結論付けるのが、この説の特徴である。

#### 2.2.1.2 単一言語システム説による言語発達の三段階

単一言語システム説では、同時バイリンガル児の言語発達は段階的だとし、次の第一、第二、第三段階が提唱されている。①第一段階を2歳頃までとする。この段階では言語の違いを識別する能力はなく、入力される言語情報は、言語の別なく単一の言語システム中に混在した形で蓄積されていく。従って、産出される発話もその混乱状態を反映するものであるとす

る。その裏付けとして、同時バイリンガル児の発話資料を収集・提示し、2歳頃までが複数言語の混合使用率が一番高いとしている (Fantini, 1978; Redlinger & Park, 1980, Taeschner, 1983; Vihman, 1985; Volterra & Taeschner, 1978)。更に、二つの言語にまたがる同義語 (Translation equivalents) も発話の中にほとんど見られないとし、それを単一言語システムを支える証拠の一つとしている (Volterra & Taeschner, 1978, p. 312)。

②第二段階では、語彙をミックスする率が前段階よりも減少し、2歳頃から言語の違いを本人が意識するきざしが認められるようになる。そして、3歳頃までに語形を変化させることが出来るようになるが、言語のシステムに関しては、依然として、一つであるとする。

③第三段階に到達する4歳頃までに、語彙のミックス率は、前段階よりも更に減少し、文法的な文の生成が可能になるとする。そして、同時バイリンガル児は、この段階に到達して初めて、一言語につき一言語システムを有するようになるとする。

## 2.2.2 複数言語システム説

### 2.2.2.1 社会言語学的な分析

単一言語システム説に相對するものに、同時バイリンガル児は、二つの言語の入力を受けながら育つ当初から、言語の違いを聞き分ける能力を持っているのだとする説がある (Genessee, 1989; Genessee, Nicoladis & Paradis, 1995; Pearson, Fernandez & Oller, 1995; Pye, 1986; Quay, 1995)。この複数言語システム説からすれば、同時バイリンガル児のコードの切り替えは、入力、優勢言語、言いやすさや好み、適切な語彙の不足等様々な原因により起こるのであって、言語的な混乱により起こるのでは全くないとする。そして、単一言語システム説は受け入れ難いとする根拠として、もし言語システムが一つしか存在しないのであれば、発話が産出されるいかなる場合においても、二つの言語が無差別に何の系統性もなく使用されるはずであると。更に、もし、文脈、状況、伝えたい内容、強い言語・弱い言語の別等により、二つの言語使用の違いが見られるのであれば、それはまさに、複数の言語を識別する能力を同時バイリンガル児が持っていることを物

語るものであるとする (De Houwer, 1990; Genesee, 1989; Gumperz, 1982; Halmari & Smith, 1994; Meisel, 1994; Mikes, 1990; Quay, 1995; Romaine, 1989; Saunders, 1988)。

#### 2.2.2.2 単一言語システム説の根拠とされたデータの再分析

以上の観点から進められた研究結果により複数言語システム説の裏付けがなされてきたのであるが、それに加えて単一言語システム説の結論付けに活用されたデータ (特に, Volterra & Taeschner, 1978) も再分析された (De Houwer, 1995; Fernandez & Oller, 1995; Genesee, 1989; Genesee, Nicoladis & Paradis, 1995; Pearson, Fernandez & Oller, 1995, Quay, 1995)。そして、その結果により、次の点が明らかにされた。①単一言語システム説を引き出したデータは、発話が産出された時の状況に関係なく、語彙の混合使用が認められる発話のみを個別的に抽出したものであったこと。②しかも、そのデータは、研究対象のバイリンガル児 (ドイツ語及びイタリア語) が、ドイツ語話者である母親と会話を交わす場面からのみの発話の抽出であったというものである。これらの指摘が重要な理由は、言語の識別能力の有無を問題にする場合には、話し相手によりいかにコードの切り替えに変化が起こるのを見ていく必要があるからである。脈絡のないデータからは、コードの切り替えの要因を解明することは不可能である。しかも、イタリア語話者の父親との間のデータがないために、入力と発話との関係を読み取ることは不可能である。なおこの家族は、イタリアに住んでいたのであるが、父親も含め周りの人々とのコードの切り替えについても不明である。単一言語システム説が、社会言語学的な観点からのデータとその分析のないまま結論付けられたことが分かる (De Houwer, 1995, p. 231)。③加えて、分析に使われた語彙の総数は、同時バイリンガル児 (Volterra と Taeschner の) 二児が、各々、1; 10歳, 1; 6歳の時点で産出したごく限られた語彙、計 137語であることも指摘された。

2.2.2.3 一語発話期のコードの切り替えに見られる同義語が示唆するもの  
次に、同時バイリンガル児の初期の発話に同義語が二つの言語で適切に

使い分けられている事実が認められれば、それは同時バイリンガル児が言語の違いを識別する能力があるから可能なのである、という見解からの研究に注目してみたい。同義語に関する研究の中で最も説得力のあるのは、Quay (1995) である。Quay は、次の方法で同義語の有無の調査を行った。ある研究対象児が、同じおもちゃでスペイン語話者と遊んでいる時と、英語話者と遊んでいる時の様子を 1;01 歳時から 1;10 歳時頃まで、週一回の割合でビデオに収めその対象児の発話の分析を行った。その結果、1;10.1 歳で産出された 300 語中英語は 50% で、スペイン語は 35% であり、13% は英語とスペイン語の区別が付きにくく、2% は成人の言葉から非常にかけ離れた発話であったという。更に、その研究により、1;0 歳で産出された 3 語の内、同義語は 2 語であったのだが、それが徐々に増え、1;10 歳時には産出された 108 語中、同義語が 54 語認められたということも明らかにされた (Quay, 1995, pp. 375-376)。

バイリンガル児が意図する伝達の内容、状況、時等の別なく、二つの言語使用の違いが認められるのであれば、それは、同時バイリンガル児の複数言語の識別能力を物語るものである、という観点からすれば、Quay の研究は、その目的を十分に果たしていることになる。適切な同義語の使い分けを明示したこの Quay の研究は、バイリンガル児の言語の識別能力を証明する上で貴重であり示唆に富む。この研究を深めていけば、興味深い結果が得られよう。例えば、成人に近い言葉の発話が可能になるのは、多くの場合 1;01 歳時前である。発話が可能になった最初の時期からの同義語の産出、及び日常生活の中での同義語の産出に興味を持たれる。

### 3. T のコードの切り替えに見る同義語

この項では、特に T の発話に見られる同義語を発話録音の文字化テキスト (0;8.9~2;0) から抽出していくが、T の発話のみを抽出するのではなく、対話者の T に対する発話も含めて記載していくことにする。それは、同義語が無秩序に産出されているものなのか、それとも相手によって同義



語のなんらかの使い分けがなされているかといった疑問を解く上で重要な意味を持つからである。同時バイリンガル児のコミュニケーションストラテジーを解明する上でも重要である。

以下、Tが産出した同義語をその産出順に記述するが、日英両語のうち初出された方の言葉を先に見出しに記す。例えば、3.1では、“Yeah”よりも日本語の「アイ」の方が先に産出されていることを示す。また、見出しにはTの意味する言葉に最も近い大人の言葉を使うが、見出し以外はTの発話のままを掲げる。従って、Tの実際の発話は「オ<sup>□</sup>イチュ」であるが、見出しは「おいしい」となる。なお、Tの日本語の発話は「<sup>□</sup>」に片仮名で示す。英語の発話は／<sup>□</sup>／内に示すが、発音が標準と異なる場合には発音した通りを〔<sup>□</sup>〕に発音記号で示す。Tの発話の意図が不明確な場合にはその表現を（<sup>□</sup>）内に入れ、発話が不確かな場合にはそれに続けて??を付加する（例〔kwa: kænja〕(Can you??)。定型表現（例「ナ<sup>□</sup>イナイバー（いないいないばー））は一語以上で成り立っているが、一固まり表現として記載する。日本語と英語が混合して使われた発話は、「メー “No” ネ」（目は書かないでね）のように表す。

3.1 あい、うん、はい、Yeah, Yes——要求、賞賛、否定等の意思表示の主流は、「ア」であるが、9か月頃になると「ア」の他に言葉らしい一語発話（日英両語）が産出されるようになる。言葉らしい言葉のうちで非常に多いのが返事（肯定的及び否定的表現）である。まず、肯定的な返事に注目したい。

(0;8.9) M: はいお腹に無理のない食事です。はいどうぞ。はい。はいって言えましたよ。ほしい? T: 「ア<sup>□</sup>イ」。 M: You like *tofu*? T: 「ウ<sup>□</sup>ン」。 M: Another bite? T: 「ア<sup>□</sup>イ」 M: そうですね。はい。Would you like to have some more? T: 「ア<sup>□</sup>イ」 M: 上機嫌ですね。T: 「ア<sup>□</sup>イ」 M: Have another bite. T: 「ウ<sup>□</sup>ン」 M: もう終わり。もっとほしい? T: 「ア<sup>□</sup>イ」 M: はい、上手、上手、はい。M: Yes, yes. “I

wanna have some more. I'm hungry, you know.” T: /Yeah!/ 英語で繰り返すことで欲しい気持ちがいっそう強く伝わる。M: 本当によくおしゃべりができる。T: 「ア」イ (以上のすべての場面でH (4.1 参照) が同席している関係で, Mの発話に日本語が多い。)

(0; 9.6) M & D: Tちゃん。T: 右手を挙げ, 「ア」イ。

(0; 10.2) M: It's hard. Just chew on it. T: /Ah! Yeah, yeah yeah./ [aiwɔn] (I want)。

(0; 11; 9) 洗濯物をMに「ア」イ 「ア」イ 「ア」イ」と手渡し手伝う。

(1; 1.5) M: もっとほしい? T: 「ウ」ン。

と深くうなずく, この時期は「ハ」イ (この数日前) も言えるようになっているが, ウンも多く使用。)

(1; 2.3) 電話器を口に当て電話をかける真似をしながら, 「ア」イ」を多発。

(1; 2.9) 返事の「ハ」イ」を明確に言えるようになる。

(1; 3.2) M: Shall I put a sticker on for you? T: [jei jei]

(1; 4.1) DとMに名前 (日本語) を呼ばれ挙手をして, 「ハ」ーイ」。M: Would you like some more milk? T: [je: j] (Yes)。

(1; 4.5) M: You have four stickers. T: Yeah! と感激。M: Read it to me. Does it say something about you? T is a very good girl, T: /Yeah!!/ M: Yes, T is a very very good girl!

手にステッカーを付けるのに成功し, /Wah! /「ア」ッタ 「ア」ッタ!」 [h ha:] /Yeah! Yeah! Yeah! / と日英両語で感激の様子を表す。

(1; 4.6) M: You've found a sticker. Haven't you happy? T: /Yeah! Yeah! / ドアのチャイムに驚くほどはっきりと「ハ」ーイ」と答え席を立つ。

(1; 5.1) M: Look at yourself in the mirror. T: /Yeah! Yeah! Yeah! / と面白がりながら鏡に写る自分の顔に見入る。

(1; 6) M: Do you want to come to Mommy's bed and sleep? T: /Yeah!!/

(1 ; 6.3) M : Will you brush Mommy's teeth? T : [ʊraiápn] (All right. Open.)

(1 ; 11) M : Do you wanna go swimming again? T : 「ウ　ン」 と返事をしてから目を輝かせ、T : Yeah!

(1 ; 11.4) M : Dive! 布団の上でダイブして遊ぶ。さんざん遊んだことをDにMが話すのを聞いてTも会話に加わる。M : We did "Dive," didn't we? T : /Yeah!/

3.2 Yum, Yummy, Like, Good, ウマウマ, おいしい, おいしかった——英語で味を尋ねるMには英語で、日本語で尋ねるDには日本語で答えている様子が分かる。

(0 ; 8.9) M : はい, おいしい. 良かった. T : /Yum, yum yum./ M : Yum, yum. T : [ɑ:nj^n] M : Would you like some more? T : /Yum./

(0 ; 9.8) りんごが美味しくて「ン　マンマ」「ウ　ーウ　マ」 [u:umθ^mj^m] /Hummm!/ M : Daddy's soup is delicious! T : [la: lúlθlulθ] を6, 7回一気に繰り返し、幸せそうな表情。

(1 ; 0) 食事時の表現が更に豊かになり, [um jθjθjθjɑ:!] (Yummy!) が上記の表現に加わる。風呂上がりに, 自分の足をタオルで拭きながら, その感触を喜ぶかのように, [a: laik] (I like))。

(1 ; 6.2) M : How is it? と味を尋ねるMに, T : [gu:] (Good) と応答。

(1 ; 9.7) D : おいしい? T : 「ア　ーオ　イチュ」。

(1 ; 9.9) D : おいしい? T : 「オ　イチュ」 D : おいしい? おいしい? おいしくない? T : 「オ　イチュオイチュ」「オ　イシ　イ」。

(1 ; 11.4) D : おいしい? T : 「ア　ア　オ　イシカ　ッタ！」。

(1 ; 11.8) Mと一つのアイスクリームを交互になめて楽しむ。M : It's your turn. 一口なめて, T : /Um! / 「オ　イシ　イ！」といかにもおいしそう。

3.3 More, I want, More water, Carrots, Two please, もっと, ちょうだ

い、ない——食欲の旺盛なTは、「アー」を多発し、食べ物の催促をする食事風景が常であったが、徐々に言葉で催促するようになる。Mだけがいる席では、“More”をDも同席している時には、“More”と「もっと」、「ちょうだい」の日英両語を使用する。願いがかないそうにないと見て取ると“More!”を多発。食べている物がなくなったことを「ない」と言葉で知らせる婉曲的に催促する方法や、実際に何が欲しいかを表現するようになる。

(0; 8.9) T: /Ah!/ [ma:].

(0; 10.2) M: Would you like some more? T: /Ah!/ [mɔ:] (more!) とMに食事を催促。ビスケットをMに催促し、T: [awawayawa ai wɔn] (I want it.)

(1; 2.3) 食事時のMへの催促は主に [mɔ: mɔ:] (More) となる。

(1; 6.9) M: Would like some more water? T: /More water./

(1; 8) /More/ と明確な発音でMに食べ物の催促。

(1; 11.4) Mに“Dive”の真似を繰り返すようにせがみ、/More! More!/ DとMに空中に持ち上げてからさっと下げる遊びを何回も繰り返してほしがり、/More, more!/ の連発。更にねだり、/More! More!/ 「モッ コモッ コ」(もっと) と日英両語でねだる。D & M: もっこもっこだって(笑)。

(1; 0.8) D, M, Tの三人で食事をしている時の食べ物の催促に「チョダイ」をTが連発するようになる。その言い方がとてもかわいいところからDとMが真似ると、以来その表現をMとだけいる時もかわいい感じで頻繁に使うようになる。ただしMと二人だけの時に強要する時は、/More/ である(4.1参照)。

(1; 4.5) 空の瓶を差し出しながらDとMに「ナイナイ」と、婉曲的にミルクを要求するようになる。

(1; 7.3) Mに向かって、/Carrots, two please./ と何がほしいかを言う。

34 ヤッター!, 立った!, 出来た!, ついた!, あった! 出た!, 入っ

た！，ヒャー！，見つけた！，ヒュー！ *Ah!, Down, Wah!, Wheel, Ha!, Ha!, Daddy!, I got it!*——日英両語共に，表現豊かに成就・満足の気持ちを表現しているのが分かる。

(0;8.9) Mにだっこされてのことだが，トイレに成功し，「トウ」トウトウトウトウ」「ア」タ」ー！」(ヤッター！)。おんぶだが膝を伸ばせて大喜びで，「タ」タタタタッ」タ！」(立った)。うつ伏せに成功し，/Ah! Uh! Yeah Yeah!/. 這い這いが三つできて，「デ」タ」ー！」(できた)。(以上の場でHが同席)

(0;9.8) M: You can talk, can't you? I'm very proud of you. T: [mu: muməɾɾməɾɾməɾɾ] [ɾurɾlurɾlurɾlarɾɾre] M: Wow! You can talk a lot, can't you? T: [á: mbéləbeləbelə] [lélələlə] M: You learned to chew food well, didn't you? T: [á: nlelələ] 誉められると舌先で上の歯茎を軽く速く叩きながら一気に英語の抑揚で喜びを表現することが多い。

(0;11.9) DとMとの風船遊びで「プ」ープープ」「ア」タータッ！」「ア」ヤタッ！」[je: i] [jejejeje] /You, you!//Ah! Yeah! Yeah! Yeah!// と日英両語を発しながら喜喜として遊ぶ。

(1;0) 自分でコップから飲むことに成功し，/Ah!!/ D, Mとの食事場面。食べ終わり，T:「ア」ターッ」(ヤッター！)。

(1;0.5) 自力で滑り台の上まで登りつめ，T:「ヤ」ッター」(ヤッター)とDとMに知らせる。

(1;1.4) M: Pick up the fan. に応え足元のおもちゃ箱の中からうちわを捜し出し，T:「ア」ッタッタ ヤ」ッタッタタ」ージェコブ」(やった！)。

(1;1.7) 物につかまり立ち，T:「タ」ッタッタッ」タ」ッタッ」タ」ッタッ！」。DもMも感激し拍手。M: 立った，立った，立った。Standing, standing!!

(1;2.7) テーブルから降りるのに成功し，[da:] (Down) と誇らしげにMに知らせる。

(1;4.4) DとMとの食事中，マカロニの味に感激し，T: /Wah!//

(1;4.5) 手にステッカーを付けるのに成功し, /Wah! I got!/ M: Aren't you happy? T: /Yeah!/ 一人遊びの最中にステッカーを自分で付けるのに成功し, T: 「ツ イターッ」 「ア ッタ ア ッタ!」。

(1;5.2) 滑り台を滑り下りながら, T: /Whee! Whee!/ 着地に成功し, [dɑ:n] (Down!) と目を輝かす。M: You're an apple dumpling! T: /Apple!/ M: Shall I pin your hair? M: /Ha! Ha! Yeah!/ M: You can tell where your eyes and nose are. I'm very proud of you. T: /Ha! Ha!/ と誉められて声を弾ませる。

(1;6.3) 中国から帰宅したDを迎え, /Daddy!/ と大歓声。知人宅でDの迎えを待つTは, Dの声を玄関先に聞きつけ, /Daddy! Daddy!/ と叫びながら玄関へ走る。Mが日英両語で絵本を読み聞かせている場面では, 英語で読んでもらえるのを喜び, 大きく息を弾ませる。M: Shall I read this book in English this time? T: /Ha!! Ha!!/

(1;6.9) 水に濡らすと絵が浮き出る絵本でアメリカ人の友達Jと母親のLと遊ぶ。絵が浮き出ると感激し, T: [pa:] /Wah! Wah! Wah! Wah!/ 石鹸箱に石鹸をいれるのに成功し, 「ヤ ッタ ー ヤ ッタ ー」とDに大喜びで知らせる。

(1;7.3) TVで魔術を見て, [əpɑ:] [pɑ: wəwəwə] /Ha! Ha!/。ベッドから自力で降りるのに成功し, /Down!/ と目を輝かせMを見る。

(1;7.4) 紫の靴を見て, /Wah!!/

(1;8) Tがけがをするのではないかとの祖母の心配をよそに, 炬燵から何度も飛び降り, 「ア ヒヤ ー エ ヘッ エ ヘッエヘッ!」。

(1;8.2) 料理をするDのそばでなまこの感触に大喜びし, 「ヤ ッタ ー!」。Dとお風呂で, 「デ ータ ー」(影絵が出た!)。大人の靴を履いて一人遊びの最中, 「ハ イ ッター!」(靴に足が入った)。

(1;9) M: I heard a car coming. T: /Wah. Daddy!/ M: Go and look. DがTを呼ぶのを聞きつけ, T: /Ah! Ha ha ha!/ D: 英国からの客Pに向かい, いらっしゃい。いらっしゃいと挨拶をする。そのDにまつわり着

き，T：/Daddy/を（8回）繰り返す。Hに対しても，T：/Daddy/を（This is Daddy! の意味で）繰り返す。D：Yes, T：/Yes/ と英語で応答してからすぐ，Hに日本語で話し掛け，Hも日本語で答える。（Hは英国人であるが留学しDのもとで勉強していたことがあり，日本語が非常に堪能である。その様子を見ていたTは，英語をやめて，Hにも日本語で話しかける。）

(1;9.8) お風呂に持って入る物を寄せ集めMに向かい，T：/I got it! I got it!/[áigðaiǵðaiǵð] と得意な表情。

(1;9.9) 動物園で孔雀の羽が出るのを見て，「デ タ デ タ！」と感激してDとMを振り向く。おもちゃの蛇を見つけて，「へ ビダー ミ ツケター」。

(1;11.9) D：紙飛行機ああ飛んだ。T：「ア ー ヤ ッタ ー」 D：飛ばしてごらん。 T：「ヒュ ー」。

(1;11.4) Mに体を横たえ左右に揺すってもらい，T：/Ah! Ah! Ah! Ha Ha Ha! / と大笑い。M：We did “Dive.” T：/Yeah!!/ 足からの飛び込みを楽しむ。

3.5 嫌，無い，ううん駄目，嫌だ，無いよ，分かってるもう！，メ！，何回もやった，嫌よ，嫌よもう！，やらん，どけよ分かてる，あかんべ！，私の！，いいってもう！ チャー！，パンダ（が）無い，いらん，違うよ，ポッポッポ（じゃ）嫌，いいネンネ（は）これでいい，*Ah!, No!, Watch it!, Backwards, No, no! [adzu:], Wow! What's wrong?, I got it already!, I ate., I can't., You do!, I don't like to., Brush, No, look, Ma!, Yack, Where are you going?, I'm not! Ate? No, No!*—— Tは，ふいに何かに頭を打ちつけたり，保育園児にMを取られてしまうと誤解し，Tを迎えに来たMに保育園児がだっこの手を差しのべると泣き出したが，通常は，駄々をこねて泣きわめいたりするということは，まれであった。泣く代わりに，「アーアー」も含めて，知る限りの日英両語を駆使しながらしっかりと自己主張をしていることを以下の例からも伺い知ることができよう。

(0;8.9) M: ちょっと (トイレ) 挑戦してみよう。ウーン。T: 「ヤ [ー]」。  
(食事中の「嫌だ」の表現については, 4.1 参照。)

(0;9) オマルを使うようになる。セサミを見せると, トイレが終わるまで目を凝らして見るようになり, オマルに座るのを嫌わなくなる。M&H: 這い這いしてみよう。T: 「イ [ー] ヤ [ー]」。D: Tちゃん, ここへおいで。いっらっしゃい。とDの方向に這って来させようとしつこく誘うDに向かい, T: 「イ [ー] ヤ [ー! ]」。

(0;10.2) M: It's your bedtime (Repeated twice) ねんねしましょ。ねんねの時間よ。All night all day ... (歌) 子守歌が好きなTではあるが, 「ヤ [ー] ア [ー] イ [ー] ヤ [ー]」と寝るのを嫌がり泣き声で抗議。M: This is Mommy's. T: [ijei ijei] Ah! と抗議の声。

(1;0.1) 嫌なことはDにもMにも, 「ヤ [ー]」で知らせる。

(1;0.4) D: おいしい? M: あ, ちょっと辛い。A little too salty. T: 「ナ [イ] ナ [イナイ]」(辛くない)。M: You can't eat it. It's not edible. の忠告に, T: [ɔn njá: nnjɔnjɔ njɔ njɔ]

(1;0.8) M: That's Daddy's purse. May I have it please. の要請に, Dの財布を抱え込み, T: [njo: njo:] /No, no!/ と抗議。Tが遊んでいた受話器をMが戻すと [njo] [njo] [njɔnnjɔn njɔn] と口を尖らせて抗議。

(1;0.9) M: This is an umbrella. T: /Watch it!/ 取られると勘違いし, 傘をしっかりと抱き抱える。M: Hu? A lemon. T: 「コ [コ]」。M: Um. Lemon? This is a lemon. T: [njɔnjɔnon nɔn nonnon nón] M: [njonjo?]

(1;2.8) D: はい, お父さんと行こう。T: 「イ [ー]」。T: [bú: bú:] (Book, book) M: Are you gonna read the book, *Asobinokuukan*? It's really a difficult book. T: No, no! [adzu:] (I do).

(1;3.9) M: Do you want a cushion? T: 「ウ [ウ] ン」。

(1;4) 園児がMにだっこをしてもらおうと手を出すと, T: 「ダ [メー]」と言って泣き出す。



(1;4.4) Dの逆さ吊りに飽きると「イ ヤ ダ」と言い降ろしてもらう。  
D：うんこたん，ある？ない？うんこたん。 T：「ナ イヨッ！」 D：ない  
よ。 T：「ナ イヨ！」。 M：Your nose is running. お鼻が出てますねー。  
T：「ワ カ ー」「モ ウ」(わかってる，もう)。Mに追いかけられキャー  
キャー大喜びで走り去る場面。 M：Wait! Wait up! 振り返り「メ！」と睨  
み，/Bye-bye/と手を振りながら逃げる。 M：No stickers? T：「ナ ーイ」  
M：No stickers? T：/No!/ (ないったらない，というように強い調子で訴  
える。) M：Do you want to poop? Let's sit on the pottie. T：/Backwards!  
No, no!/ D（日本語）とM（英語）にトイレに行きたいかを同時に繰り返  
し聞かれ， T：/No! No! Nose! No, no!/ 「ナ イヨ！」。DとMがその答え  
を面白がり繰り返し尋ねると，同じく日英で立て続けに強い調子で抗議。

(1;4.6) 這い回りながら独り言，/Wow! What's wrong?/。

(1;4.9) M：Jump, jump! Jump again. T：[aigá rédi] (I got it already)

(1;5.1) M：Laugh! Listen to us laughing. Laugh, T. Ha ha hah! 何回  
も笑う練習を強要され， T：「ヤ ンカイ ヤ ーヤ ータ」(何回もやっ  
た)。

(1;5.2) M：Stop playing and eat your dinner, T. T：[eet ét] (I ate)  
滑り台で遊ぶのに夢中。 M：Aren't you hungry? Let's go eat. T：/No,  
no, no!/ M：Let's go to the kitchen. T：/No, no, no!//

(1;5.3) M：How about drawing a rabbit? T：/No!/ を10回連発。 M：  
Brush your teeth. T：/I can't!//

(1;5.5) Mと数字遊びをしている場面。 M：That's seven. Put down the  
seven. Seven, right there. T：/You do!/ M：Hum? Hahaha! T：[dzeb]  
(Seven)

(1;5.6) M：Draw a bunny. T：/No! No! No!/ M：I guess that's Daddy.  
Pick up the phone. この時期は電話に出るのを嫌い， T：「イ ヤ ヨ  
ヤ ーヨ」 M：お父さんTちゃん来た来た。

T：「イ ヤ ヨ」。しつこく電話に出るように言われると「イ ヤ ヨ

モ「ー！」。

(1;5.9) M: Do you want to get in the snuglie? 眠くないのにおぶい紐を Mに出され, T: /No! No!/。

(1;6.3) M: Your hand is sticky sticky sticky, You like it sticky? T: /Ah! / M: Shall I wipe you? D: お, 泣く泣く。 M: ね。 You don't like to be wiped? T: /I don't like to./ 2回目は明確な発音で拒否。(likeは, すでに(1;2.7)に産出されている。風呂上がりに足を拭きながら気分良さそうに, T: [a:] /like/ (I like) M: Nice, isn't it?)

(1;6.5) M: Brush your teeth. と何回も言われて英語の抑揚で長い文(?)で拒否。

(1;6.7) D: うがいして見せて。 M: Gargle. Show Daddy how well you can gargle. T: 「イ」ワワワ「イ」ラ「ン」ウ「ウ」ン「ヤ」ラ「ーン」。

同時期, 歯磨きを嫌がり Dに向かって, 「ド」ケ「イヨ」ワ「ワワワ」ワ「カ」ー！」(どけよ, 分かってる)「ア」ーカンベ「イヤ」(あかんべ)。

(1;6.9) D: Tちゃん, ジェシカちゃんの靴どれ? ジェシカちゃんの靴。それもTちゃんの靴。ジェシカちゃんの靴ここにあるよ。ジェシカちゃんのクックねー。 T: 「ウ」ウ「ーワタシ」ノ」 D: ん? T: 「イ」イッテ「モ」ー「チャ」ー！」。頭を物にぶつけ立腹し, その物を「チャ」ー！」と言いながらぶつ。

(1;7.3) M: Let me change your diaper. T: 「バ」ッチ「ー」 M: Yes? T: 「イ」ヤジャ「ヨ」。 M: Read it to me. I'll be listening to you. T: 「オ」カ「ージャンワー！」と拒否。 D: 上がれる, 一人で? T: 「ヒ」ト「リジャ」ヤ「ーヤヤ」。

(1;7.5) テープレコーダーの録音した貴重なテープを引き出して遊ぶのを Mに止めるように言われ, 「ヤ」ダ！」そして「イ」ヤ「イ！」を17回も繰り返す。何故いけないのかを諭して止めるように言えば, 理解することが出来る分別がついていたが, 咄嗟に Mがテープレコーダーを取り上げたことへの力一杯の抗議である。この時は, Noは産出されていない。 M: I'm

sorry, you can't play with it. I'll let you play with this instead. と英語で言い聞かせようとする間ももっぱら「イ」ヤ「イ！」である。

(1; 8.4) M: I'm going to bed. T: /I'm not!/ (ノ)

(1; 9.6) M: Shall I read "Flutter, Flutter?" T: 「イ」ヤ「ヨ」。

(1; 11) D: 面白いね。T: 「オ」モ「ジュナーイ」。D: ヤッスンスンする? T: 「シ」ナ「ーイ」。パンダの縫い包みが見つからず、「パ」ンダナーイ。

(1; 11.4) M: Shall I dial it for you? T: 「イ」ラン「ハ」イ D: はい。T: 「ア」ラカジャー? D: ン? T: 「ン?」 M: Bye-bye. Did you say "Bye-bye?" T: 「サ」ツキズット「ラ」ーヨ M: Bye-bye? T: 「チ」カ「ウヨ」(違うよ) M: Did you say "Bye-Bye?" T: 「チ」ガ「ウヨ」。D: おばあちゃん, おばあちゃん。M: おばあちゃん, おばあちゃん, おばあちゃん? T: 「オ」バ「ーチャ」。

(1; 11.7) D: はい, ねんね。T: 「ヤ」ーイ「ヤ」ーヤ「ヤ」イ「イ」ーヤ「イヤイ!」。M: Shall I change your diaper? T: 「イ」ヤ「ラ」。M: 嫌だ? T: 「ナ」イ。「イ」ヤ「ーダ」。M: ポッポッポ (ポッポッポ歌おうか)。T: 「ポ」ッポッポ「ナ」イヨ (ポッポッポじゃ嫌)。M: Lie down. T: 「イ」ー「ネ」ンネ「コ」ゲエーデ (いいネンネ (は) これでいい)。

(1; 11.8) M: Daddy has already eaten. T: /Yea?/ [nja:] /No!/  
 (1; 11.10) M: How about "TwinkleTwinkle?" T: 「ナ」イヨ。M: ない? How about "One LittleTwo Little" T: 「イ」ヤッ。M: ポッポッポ? T: 「ポ」ッポ「ナ」イヨ。M: ポッポッポない? Shall we sing, "Tulip" again? T: 「ヤ」ダッ。そして, MとDの歌うチューリップに唱和する。

3.6 痛いよ, あいた!, イタタタッ! 痛い, あ痛いよ, あ痛いな, *Ouch!*——自分が痛いめに合い, 咄嗟にその思いを口にする時には, ほとんど日本語である。但し, 英語の絵本を読み聞かせている時に, 猫と犬が引っ掻き合う場面では, "Ouch!" と言い痛そうな顔でMを見る。

(0; 8.9) H: 「這い這い運動」ってどんなんですか。M: ちよつとして見せてあげましょう。はい。T: 「ア タタ イ タ イヨ」。

(1; 0.8) Mに爪を切ってもらっている場面。爪を切ってもらう度に、「ア イダッ」(痛い) 「ア イタ!」 「ア イタ!」。 M: Really? I don't think so.

(1; 2.1) 手押し車を強く押し過ぎて思わず, T: 「タ タタッタッタ!」。

(1; 3.3) 蜂が花の回りを飛んでいる絵本をTに読み聞かせながら, M: Bees say, "Buzz! zzz ..." と蜂がTの方へ飛んで行く真似。 T: /Ouch!/  
/

(1; 4.4) 自動車の座席の端に足をはさみ, 「イ タ イ」。

(1; 4.5) 大人の靴をはきよろけて, 「ア イタ ヨ イショ ア イタ イーヨ」。

(1; 4.6) 無理やり手からステッカーを自分で剥がそうとして, 「ア イタ イナー!」。

(1; 4.8) M: Where does it hurt? D: どこ痛い? 自分の腕を押さえ, T: 「イ タ イイ タ イ」。

(1; 5.3) MとDに飛び火の傷痕を見せ 「イ タ イ ータイ」。

(1; 6.7) Mが読み聞かせている絵本で犬と猫がひっかき合う場面になると, [au] (Ouch!)

(1; 9.8) D: ソックス脱いで。 T: 「ア チャ イ タ ーン」。

(1; 11.1) Dと行った動物園でやぎに噛まれた指を見せて, 「イ タ イイ タ イ カ ンダ」。

(1; 11.6) かゆいことも英語では, /Ouch/ を使用。日本語では, かぶれたように乾いているあごの下を差して, 「カ イ イ シ ユシユ」と薬のスプレーを催促。

(2; 0) 上記の絵本の(1; 6.7) 犬と猫のひっかき合いの場面で, /Ouch!/  
/

3.7 *Hum?, Ah?, Yeah, No?*, あら, あれ, あったはずだがな——予想外のことに会おうと不思議そうな表情をして, 言葉でもその気持ちを表現す

る。

(0;8.9) テープレコーダーに触り不思議そうに, T:/Hm Hah?/ と独り言。

(1;2.3) ジュースのビンの栓が取れないのを不思議がり, T:「ア」ヤ」と独り言。

(1;3.3) Mの化粧箱の物を取り出して遊んでいる時, 手に持っていた物を取り落とし, T:「ア」ラ?」。

(1;3.8) 鏡の自分を見て不思議そうに, T:/Ah? Ah?/

(1;4.5) 自分の姿を鏡に写し, T:/Yeah Yeah Yeah!/

(1;5.6) M: Where did your pillow go? T:/No?/ (いぶかる抑揚)

(1;7.3) 一人遊びの最中, いろいろな物を手に取り不思議そうに, T:「ア」ヤ 「ア」エア「レ」。

(1;9.9) 何やら一人で物を捜し回りながら, T:「ア」ヤ 「ア」ヤ」。

(1;11) 「ア」ッタ 「ア」ラ」(あったはずだがな) と独り言。

3.8 頭, *Head*——体の部分を自ら示しその名前を言い, 誉めてもらうと, それが大きな自信につながる様子が伺える。体の部分は, 日本語では「頭」と「目」が初出であり, 英語では, “Eye”である(0;11.7参照)。

(0;8.9) 「タ」ーア「ー」「ア」ッタ「ー」とDの注意をTに向けるために頭を差して見せる。

(0;11.7) 頭と目を指しDに対して「ア」タ「ンマ」メ「ノ」と知らせる。

(1;6.9) 「ウ」エ「ア」タマタフーワー」(上で頭打ったわ)。Mと体の部分の言い当てごっこ。頭を差して, T:[je:] (Head) (同じ時に/Ear/, [i:jəjə] (Pull your ears??) と指示している)。

(1;11.8) Mにプラスチックの蛇の頭が取れたことを, /Head broken/ と言い知らせる。

3.9 *Dada, Daddy*, おとうさん; 3.10 *Mommy, Mama, Mom*, カカ, お

母さん——時と共にDとMの呼び方が少しずつ変化しているが、Dの場合には“Daddy”が圧倒的に多く、日本語で話す時もDはあくまでも“Daddy”である。“Mommy”が産出される前に「マ」また“Ma”で食事中にMを呼んでいた可能性はあるが、食べ物の催促も同音であるため、両者の区別は明確ではない。従って、Mを呼んでいることが間違いのない“Mommy”から取り上げる。圧倒的に多いのは“Mommy”であるが、保育園では英語はいっさい使わず、「お母さん」だけを産出している。日本語が急に強くなった一時期に、家庭でもお母さんを多く使用するが、約半年後には、“Mommy”の呼び方に戻る。

(0;9.8) [da: da:] を繰り返す、Dを起こそうとする。

(0;10.2) Mとの食事中、/Daddy/ とDの助けが欲しい気持ちを表わす。

(0;11) コアラを見つけ、「ア ツタ!」[da: da:] (Daddy) と注意を引く。

(0;11.4) 帰宅したDの車の音を聞きつけ、[dá: dá:] とMに知らせる。

(1;0) [da:] とも言うが、しっかりした声で、/Daddy/とも呼びかける。犬の目を指しながらMに向かい、T:/Eye. Mommy, Mommy./ とMの注意を引く。物を捜し出し、「カ カカ ア ツタヨ」と日本語でMに話しかける。しかし、この時以外は、Mommy と呼ぶ。

(1;0.9) 日英両語で発話が多くなるこの時期にも、Mを呼ぶ時は、/Mommy/ のみが聞かれる。

(1;1.1) D: おかあさんって呼んでごらん。Dの提案を強い調子で退け、T:/Mommy!/ と主張する。

(1;2.1) 電話で一人遊び。「ア イ オ カ ーシャンワ ア イ ア イ」と誰かにMのことを聞かれ答えている様子。家族以外の人と話す時は、/Mommy/ではなく、「オ カ ーシャン」を使う。

(1;2.3) 独り言の中で、「オ カ ーサイサイ」「オ カ ーサンワ」(4.9参照)。

(1;2.4) 「ア ー」とか /Mommy/ だけでなく、Mに対して、/Mama/ を使う。

(1;5.2) 手足口病から回復し、心身共に一段と成長した様子が伺える。保育園では大きな汽車を押したり、ブランコを漕ぐことに挑戦。ロッカーの隙間の取り合いは、勝つまで喧嘩を諦めないほど活発になる。言葉の方も保母や回りの友達の話し方をよく聞いている様子が、Tの発話から分かる。保母が毎日繰り返す「先生さようなら、お母さんと一緒に帰ります」を聞く度に、保母に呼応して「オカ一サン」が上手に言えるようになる。MがDを呼ぶのに合わせ、「オト一サン」と大きな声でDを呼ぶ。

(1;5.3) 本読みをしてやっているMの顔を覗き込みながら「オカ一サン」とやさしく4回呼びかける。/Mommy! Mommy!/とも呼ぶ。

(1;5.6) 「オカ一サン」と大声で呼ぶ。写真のMを指し、「オカ一サン」

(1;6.2) /Daddy/と呼ぶ発音がはっきりする。

(1;6.8) Dの帰宅に気づき、/Daddy! Daddy!/ [dá: dá:] と玄関に走る。

(1;7.3) Mにベッドから降ろして欲しい時は「オカ一サン」/Down!/。

(1;8.6) 夕食の最中椅子に座ったまま、DとMの三人でしたことを思い出さず様子で、/Mommy/, /Daddy/ と独り言で盛んにおしゃべり。

(1;9.8) 保母に呼応して「サヨナラカ一サント」まで言える。

(1;10.3) Mに甘えたいとなると優しい声で、T:「オカ一サン」と呼ぶ。

(1;10.5) D:お母さんって言ってごらん。T:「オカ一サン」と答えたのだが、やはり落ち着かない様子で、/Mom/と言い替える。D:おとうさんって言ってごらん。T:/Daddy/と何のためらいもなく発話。

(1;10.6) M: Give this to Daddy, saying “Here you are.” とTに指示を与えると、T:/Here you are, Daddy./とタオルをDに渡す。電話のそばに置き忘れてあったDのコップを見つけ、T:「“Daddy”ノ」。

(1;10.9) だっこをして欲しがるとTに応じてやると、/Mom/と言いながらMの頬を両手で挟み軽くぴちゃぴちゃと叩き「チューッ」とキスをする。

(1;11) 庭に出たMを追い、T:「オカ一サン」「オカ一サン」と呼びながら外に出る。Dの靴下を拾い、DにとMにともなく、T:「“Daddy”

ノク「一タ」。

(1;11.2) MがTにうがいの仕方を教えているのを見にきたDに, T: 「“Daddy”モ」とDにもうがいをするように誘う。

(1;11.3) Dの帰宅の車の音を聞きつけ, T: 「“Daddy”ダ」。

(1;11.4) Dの靴下を拾い上げ, T: 「“Daddy”ノク「タ」一タ」と独り言。テレビで子供が「シュシュ歯磨き。仕上げはおかあさん」の歌に合わせて歯を磨く場面を見せると, 嫌がらずに歯を磨く。そして, 仕上げの場面では, Tも「オ「カ」一サン」と言い歯ブラシをMに渡し仕上げを要求。「オ「カ」一サン」「モ「ッコ」」と言いながら仕上げを5回も催促。

(1;11.5) 約半年余り「オ「カ」一サン」と言ってMを呼んでいたが, その後はほとんど聞かれなくなる。「オ「カ」一サン」と呼ぶ言い方を止め, 再び/Mommy/に戻る。

(1;11.7) Dと野球をして遊んでいたT, /Mommy/と言い, Mにも加わって欲しがる。D: マミー, 忙しいって, とMが加われないことをDが話すが, Tは承知せず, /Mommy/を何回も繰り返しMを野球に誘い入れる。

(1;11.8) 留守番電話に録音されているDの声を聞き, T: 「“Daddy”ヨ」。

(1;11.9) 夜中にMを起こす時はいつもは「ア」一」ア」であるが, 「オ「カ」一サン」と寝言を言う。T: 「“Daddy”コ「レ」」D: これ醤油よ。T: 「“Daddy”モ「一」オ」キテ」。

3.11 「バー」, 「ナイナイバー」, Boo! —— MはTと遊ぶ時は, ほとんど Peek-a-boo! と言って遊んでいたが, 保育園で日本語でその遊びを見聞きしたり, 保母に遊んでもらうことが多いために, Mの英語での誘いにも, 日本語で主に応答していた。“Boo!”で遊びにのってくるようになったのは日英両語共に発話の量が増えた時期である。

(0;10.2) M: Peek-a-boo! T: 「バ」一」。

(1;2.6) Mの後足に掴まり立ちをして足の間から, T: 「ナ」イナイ バー!」。



(1;3.3) M: Peek-a- T: /Boo!/  
[1;3.8) M: Peek-a-boo! T: 「バ」。

(1;5.2) M: Peek-a-boo! T: /Boo!/  
[1;10.7) 保育園で泣いている年下の園児を、T: 「ナ」イナイバー！」を

してなくさめる。

3.12 *I want., I don't like to., I wanna do., I need., I want to dive.,* 降りたい——自分がして欲しいこととそうでないことは、「ア」が主流の乳児期からはっきりと意思表示をしていたが、「ア」から英語は徐々に“Want”, 日本語は「～たい構文」でも表現できるようになっていく。

(0;10.2) M: The cracker's hard. Just chew on it. T: /Ah! Yeah, yeah yeah./ [aiwɔn] (I want)。お菓子が堅いからもうもらえないのかと思ったらしく、Mをしっかりと見詰め英語で望むことを伝える。

(1;5.6) 論文を書くMのそばに来て、T: [ai tsutsubá:] [pe:] [á: pé:] (I want to draw. Pen. A pen)。M: Oh, you want to draw? お絵描き? はいはい。Write on this paper. T: /Ah!/ [a: pé:]

(1;6.7) M: Shall I wipe you? T: /Ah!/ D: あー泣く泣く泣く。M: ね。You don't like to wipe. T: /Ah ha./ M: You don't like to be wiped, do you? T: /I don't like to./

(1;6.9) J (5歳のアメリカ人)とMと影絵遊びをしている場面では、Tが英語のみを発話している。J: I'll do it this time. M: You wanna do it? T: [a:ta du:] (I wanna do?) M: You wanna do it? That's great. T: /Ha ha ha. Monkey./

(1;9) D: (ベッドから) 降りる? T: 「オ」ータ「イ」。

(1;9.9) D: Tちゃん買い物行ったねー。もう自分一人で方々歩き回ってね。T: 「オ」ーイチョ M: いいなー。D: もう仕方ないからね。T: 「ア」イー D: Tちゃんとうふどことうふどこミルクどこミルクどこちゅって。M: Oh. D: 連れて歩いた。T: /I need. You you. I need. You

you, I./ M: Oh, I see. You told Daddy where the things are.

(1; 11) M: Shall we go swimming again? T: [wanedáiv] (I want to dive.)

3.13 *Wow-Wow!, Dog, Bow-Wow*, ワンワン——Mと英語で犬の絵本を赤ちゃんの時から読んでいたためか英語の方がかなり早く産出されている。

(0; 11) 隣家の犬の吠えるのを聞き, /Wow-Wow!/ と真似てゲラゲラ笑う。

(1; 0) 犬の縫い包みをMに見せ, [dɔ: dɔ:] (dog)。

(1; 2.8) 動物園から帰り, 見てきた動物のことをMの前で話している時のこと。D: うさぎちゃんもいた, 鳥ちゃんもいた。T: [wú: wu:] /Bow./ と言い犬もいたことを指摘している。

(1; 6.3) 犬の絵本を見ていたTが, /Wow-wow/ とか /Bow-Wow/ と言いMの注意を引く。

(1; 6.7) 隣の犬の黒ちゃんを恐る恐る撫でながら, 「ワ ンワン」。

(1; 11.7) 犬のおまわりさんの歌を歌い, 「ワ ンワン ワワ ン」。

3.14 目, Eye —— 体の部分のうち英語では“Eye”が一番早く産出されている。(複数形の“Eyes”は2歳までには産出されていない。)

(0; 11.7) 頭と目を指しDに「ア タ ンマ メ ノ」と知らせる。Dに誉められると嬉しそうに繰り返す。

(1; 6.2) M: Where are your eyes? Show me your eyes, T. T: /Eye./ M: Clever! I'm proud of you. の激励と賞賛に嬉しそうなT。縫い包みをMの所へ運び, 目を指して, /Eye/ とMに知らせる。

3.15 *Up, Hold it up., Upper, Hold me*, だっこ, 起きた, 起きて; 3.16 *Down*, 降ろして, 降りたい —— 保育園でのTの部屋は二階にあったため, Tをだっこして, “Up, up, we go, one, two, three.” とか “Down, down.” と

弾みを付けて階段の昇り降りをしていたためか、“Up”の発話がしばしば聞かれ、目覚める、起きる、起こすの他に、手を上げたり、起き上がる時の掛け声、だっこしたり、持ち上げてもらいたい時、帽子をかぶせて欲しい時など使用の幅が広い。“Down”は降りたい、降ろしての意味で多く使用しているが、Upとは逆に、“Down”よりも日本語でその意味を表現する方を好む。

(1;0) Tの脇の下を洗うため、M: Hands up! Mに協力して、T:/Up!/と両手を上げる。

(1;0.4) M: ううん、だっこ? T: 「ハッ ダッダッ ドード」(だっこどうぞ)。

(1;1.9) Mにだっこをねだる時はMの膝まで這って来て、/Up! Up!/をだっこしてもらえるまで繰り返す。

(1;2) Mにまたがり体をT:/Up and down!/と言いながら上下に揺する。ベッドから降りたい時は手を差し延べ、T: [da:n] (Down)。

(1;2.4) Mにまたがり、T:/Up, up, up!/ (上下に揺すって)。疲れるとMの胸に顔を付け子守歌を聞く。

(1;2.6) Upと立ち上がり、一歩歩く。それにつれ、/Up/の産出も多くなる。

(1;3.3) T:/Up! Up! Up!/と号令を掛けながら二階への階段を這いながら自力で上り詰める。降りることはできないので二階の踊り場に座りDの帰宅を待つ。

(1;3.7) 一旦しゃがんでからMに立って見せ、/Up!/

(1;4.5) M: Shall we have some soup? T:/Hold it up./ M: All right. I'll hold the mug for you.

(1;4.9) きちんと帽子をかぶせてほしがり、T:/Up!/とMに頼む。

(1;6.3) 手をDに差し延べはっきりと、T: 「ダッッコ」。

(1;6.7) パンダの上歯を、/Upper, upper/と言いながら磨いて遊ぶ。

(1;7.3) T:/Up, up, up!/とMにベッドに抱き上げてほしがる。降ろし

て欲しい時は「オ」カ「ーサン」/Down./。(1;5.6)では、Mが意識して“Down”のTへの入力を試みている。しかし、次のやり取りからも分かるように、“Down”の発話は産出されていない。M:Where did your pillow go? T:/Oh./ M:Here it is. I found it. T:/Put it, put it./ M:Put it down? I'll put it down here.)

(1;7.5) M:Read the book *Up and Down*. に応え、T:/Up and down./と言いながら本の頁をめくる。D:おりるの? Down? T:[ta:] (Down) D:手で降りるの。ベッドから腹這いに降りて、T:「オ」リ「タ」。D:ん? T:「オ」リ「タ」Dに高い高いをねだり、/Up, up!/  
 (1;7.10) Mに向かい、T:/Down. Down!/(ベッドから降ろして)。

(1;8) 「オ」オ「テ」(ベッドから降ろして)とMを呼ぶ。病氣上がりで食事中も「カ」ック「(だっこ)」をねだり、だっこのまま食事をする。

(1;9) D:降りるの? T:「オ」オタ「イ」(降りたい)。

(1;11) D:おはよ。T:「オ」キ「タ」とDが起きてきたのを喜ぶ。

(1;11.4) では「ダ」ッド「ダ」ッコ」とDにねだるが、願いがかなわぬと、英語でねだる。T:/Daddy/ M:Daddy? Thank you, Daddy. T:/Hold/ M:Hold me, hold me please. T:/Hold me./ M:That's right. Hold me please. T:/Daddy! Tが英語で話すとDが関心して、甘くなるのをよく心得ている。

(1;11.9) T:「“Daddy”モ オ」キ「テ」(もう体を起こして) D:起きてるよ。T:「モ オ」キテ」。日本語の「オ」キテ」を目覚めることの他に体を起こすという意味にも拡大して使用する。

3.17 ニャ ニャ, *Cat, Meow-Meow*——日本語の「猫」という言葉は、2歳までには産出されず、もっぱら幼児語を使用している。一方、英語では、日本語話者には難しいと思われる[æ]の発音を含む“Cat”を多用。

(0;11.2) 子猫の絵本を見ながら「ン ニャ」ンニャ「タ」ッタ」(立っ

た)「ア」ヤ」(笑)と独り言。

(1;3.3) M: Come back, T! Where are you going? T:「ニヤ」ンニヤ  
コ」イコイ」(猫これ)と絵本の猫の絵をMに見せる。

(1;10) 縫い包みの猫に食べさせる真似をしながら、「ニヤ」ンニヤ」。

(1;4.1) M: What is it? T: [kjæ] (cat) [mjæ: mjæ:] (meow) (日本語話者が苦勞する [æ] の発音は clap と言いながら手遊びをMと楽しむうちに上手に言えるようになる。(1;2.8)では, [tætæ]。(1;3.7)では[klæ]と言いMに“clap遊び”をねだる。(1;4.6)Mに帽子を差し出し[hæ]。マーケットではリンゴ売り場をMに [æp] [æpu] とMに知らせる。(1;5.6) [kjæ] (Catch); (1;7.3) M: Here carrots. T: [kjækðts]; (1;8.4) M: You are an apple dumpling! T: [æpl] (Apple) M: That's right. You're hearts delight!

(1;11) りんごジュースが欲しい時は, T: /Apple/ [dzu:] (Apple juice)

(1;11.4) DがMとTの会話に加わるが, それまでの会話の流れでTも英語の産出が多い。Dもつられて英語で話している。M: Oh, you still have hiccups? Shall I scare you more and stop them? T: Bye-bye. D: Bye-bye. M: Boo! T: Ah! D & M: Ha ha ha! You are not scared? What's this, T? T: [kæ] (Cat) M: That's right. D: That's a cat. M: What does cat say? T: /Meow/ M: Meow. Very good, T. You're so clever!

3.18 *Bye, Bye-bye!*, さようなら——家庭では“Bye”を, 保育園では「さようなら」というように日英の使い分けがはっきりしている。

(0;11.5) M: Bye! T: /Bye!/ (右手挙手)。

(1;0.2) F (米国からの宿泊客): Bye, T. T: /Bye./ 保育園では園長を始め保母はすべて女性であり, 家庭でも男性は父親のみである。そのせいか隣人でも男性が近付き話しかけると嫌がったり, 泣き出すことさえあった。しかし, このFに対してはにこやかに Bye と挨拶を返し登園。Fが話す言語が, M が話すのと同じ英語であったためであろうか。この半年後

(1;6.3) には、Mの読み聞かせの場合、英語の方を好む気持ちを明らかに表している (3.3 参照)。

(1;4.5) M: Wait up! T: /Bye-bye!/ と手を振り走り逃げ追いかけて楽しむ。

(1;9.8) 保母が言う別れの挨拶、「先生さようなら。お母さんと帰ります」に続き、「サ」ヨーナラ」。

(1;11.4) 何かして欲しくない時にも M に対して /Bye/ を使う。

3.19 *Where?, Where's...?, Where?!, Where did it go?, Where are you?*, どこ, どこで —— “Where” が頻繁に使用されるのに反し、日本語の「どこ」の使用例は以下に掲げた二例のみが聞き取れただけである。また, “Where” の方が他の疑問詞に比べ先行して産出されているが, これは “Where's...?” の替え歌を常に歌っていたことによると思われる。(“How” の意味の発話は日英共に聞かれたが, “Why” は英語のみであり, ((1;4.6) M: Did you poop? T: /No/ M: No? T: [wa:] (Why?)), 日本語では2歳までには産出されていない。“When” は日英共に2歳までには産出されていない。) “Where is ...?” の構文を使い質問を M にする時には, “Where's a frog?” “Where's a mug?” のように適切な名詞の挿入が見られる。おもちゃのかえるを捜し回る時には, “Where are you? ” と言いながら捜す。日本語では「どこで」のように, 「で」が適切に産出されている。

(0;11.7) M に対して, T: Where Daddy? M: Daddy's in Tokyo. の答えに T は泣き顔。My Daddy を読み聞かせると機嫌が直る。

(1;2.1) M: You're too busy. Look what Mommy's having? T: /Wah! Wah!/[bababebabababa]? D: What is it? T: /Where's a/ [fá: gð] (frog)?

(1;4.1) M に向って, [werzðfɔ: gð] (Where's a frog?) と質問し, おもちゃのかえるを捜す。

(1;4.5) D に手中の物を見せたくて, T: 「コイコイコイコイ」と言い D

を捜すが留守。 T: /Where?!/ と泣き声になる。

(1; 4.6) M: Pick up the mug. T: /Well, Where's a mug?/

(1; 5.6) M: I found a koala bear. T: /Where?/

(1; 7.3) M: Where's the card? Where did the card go? T: /Where did it go?/

(1; 8) M: Bye. T: /Where?/ と心配そうな顔。

(1; 9.9) M: What happened to your frog? T: /Where are you?/ (Where is it? Where has it gone?)

(1; 11.4) D: Dive, dive. テカテカテカ。 T: 「バ」カ「カタ」ウ「ンド」コ」。

(1; 11.7) M: Where are you? T: Where?

(1; 11.9) D: Dive. T: 「ウ」ン「ド」コ「デ」。

3.20 あったこれ (はい, どうぞ), あげる, ここはい, ここが, あそこ, これ, あちこち, どうぞ, あ見つけた, ここだ, *Here, Here you are!, This, Get it!*——この種の表現では, Dに対しては常に日本語を使用している。Mには日英両語を使用している。DとMが同席する場合で, 特に自分の思うようにして欲しい時には, Dに対しては日本語であるが, Mには英語で思いを遂げようとすることが多い。

(1; 0) 物をMやDに差し, 「ア」ツ「タ」。

(1; 0.5) M: Where is my glasses case? T: /Here./

(1; 0.7) D: トントントントンいたよいたよ, いましたよ。 T: 「ア」ア「コレ」 (はい, どうぞの意味)。DとTの会話が弾んでいる食事場面。D: トントントントンいたよいたよ, いましたよ。 T: 「ア」ゲ「ール」。

(1; 1.2) M (英語) がTに話しかけている場面では, Mに物を差し出ししながら, T: /Here you are!/ を度々産出。

(1; 2.2) Tが捜し当てたMの眼鏡をMに差し出しながら「コ」コ「ア」イ」。

(1; 2.3) 時計台の中の物を見つけ, 「コ」コ「ガ」ー」。

(1; 2.8) D: スヌーピーどこだろね。 T: 「ア」チ「ョ」コ」。Mに対して,

/Here you are!/ を多発。T : [i:zitʃ] (Is this?) M : Would you like some more? T : [jeʃ] (Yes) M : Are you sure? T : [dzisdzú: s] (This juice) M : All right.

(1;4.4) ステッカーをMに差し出し「コ」イコレ「コ」コ「コ」コ。

(1;4.5) D, M に対して, 「ハ」イコゲ (はい, これ, (あげる))。T : 「ア」チョ「ド」ージョ「ー」 D: どうぞどうぞって。眠くなるとおおい紐のところまでDを連れて行き, T : 「コ」ゲ (これ)。Mにステッカーを剥がしてほしがり, T : [gətʃgətʃgát] (Get it) M: Where's my glasses case? Can you find it for me? T : /Here!/  
 (1;5.2) コアラの縫い包みを見つけて, [ká: lə] とMに英語で知らせ, Dには「コ」イ「コ」イ」と知らせる。Mにも「コ」レ」を使用する時もある。

(1;6.9) Mとの食事場面。T : [pú: ti] (Pretty) M : Yes, Carrots. T : 「チョ」ーダーイ「コ」ッチ「コ」ッチ。M : Here. Carrots. T : 「チョ」ーダイ「コ」ッチ「コ」ッチ。

(1;8.7) Shall I count your toes? T : 「ア」ッチ「ク」チュクチュ「コ」コ「イ」ッコ。

(1;8.7) Shall I count your toes? T : 「ア」ッチ「ク」チュクチュ「コ」コ「イ」ッコ。

(1;9) D : じゃ僕ビールあけていい? M : はい, どうぞ。M : That's jabbling. T : 「ア」チ「コ」チ。

(1;9.5) D : あどこ? T : 「ヒ」コ「ー」キ「ア」チアッチ。

(1;9.8) M: Hand me a pen. T : Mにペンを渡ししながら, 「ド」ーゾ (Here you go.) お風呂遊びのおもちゃをDに見せて, 「コ」レ「オ」フロ「ー」ノ。Dに箸を手渡ししながら, T : 「ド」ージョ。

(1;9.9) D : 熊さんのソックスはいた。立って歩いてごらん。T : 「タ」タ「ツ」タ」を6回繰り返す。「タ」コ「ツ」チク「タ」ツ「タ」 (立った, そっち行く) を5回繰り返す。

(1;11) D : あ, これも持って入ろ。T : 「ア」コ「コ」ダ D : ん? T : 「バ」ーン D : ね, それ, ちゅうちゅうって水飛ばすのよ。D : いい子



だね。T:「ネ ンネ ネ ンネ」。M:ねんね? Do you wanna go to bed? Where's your underwear? Look for it. 捜しに一人で行き, T:「アミ ツ ケ タ」。

(1;11.4) 縫い包みを捜していた T, 「ア ミ ツケ タ パ ンダ」。

(1;11.7) 隠し絵が出たのを見て, 「コ コダー」と独り言。

3.21 どうぞ, ちょうだい, Please —— ドアを開けて欲しい時には, 日本語でまず頼むことが多い。しかし, 願いがかなわない時には, “Open!” といい直す。ぶっきらぼうではなく, “Please” (1;2.4) も産出される。食欲旺盛の T は, 「ちょうだい」を M にも多発しておかわりを次々に催促する。  
(1;0.4) M: ううん, だっこ? T: 「ハ ツダ ツダッド ード」(だっこどうぞ)。

(1;7.3) T: 「チヨ ダイ」 M: ちょーだい? T: 「チヨ ーダーイ」(正確に言い直す) T: 「ウ フ ー」(とうふ) M: どうぞ。You can have it. T: /Two please./

(1;10.1) ドアの前に立ち M に向かい, T: /Open it please./

(1;11) T: 「ド ウジヨ」と食べ物を D に要求する。D: どうぞ? はい。物を差し出す時にはだまって差し出すことが徐々に少なくなると同時に, 何か欲しい時も同じく 「ド ージヨ」 「ド ーゾ」を使う。

3.22 Dirty, バッチー —— 英語で一人遊びをする時の一連の発話の中には, “Dirty” が聞かれるが, 拒絶したい時には, 「バッチー!」の方を使っている。

(1;0.7) 一人遊びをしていた T が急に不服な声で, [njonjonjonjo] M: What's wrong? T: [doudÁdð] (Dirty) M: Oh, those are dirty?

(1;7.3) M: Let me change your diaper. T: 「バ ッチー!」と言いおむつ替えを嫌がる。

3.23 *Drop, Dropped, 落ちた* —— 英語では, *drop* が産出されてから約4ヶ月半後に過去形が産出されている。日本語の正しい発音は「オ」チ「タ」であるが, ここでは「オ」チ「タ」と言っている。

(1;0.9) 電子レンジの料理終了を知らせる音を聞きつけ, T: This is done!  
M: Hum? This's done? I turned it off. T: 「コ」ココ「コ」。 M: What's that? That's "mochi". You wanna get it? T: Ah, I drop it. M: Oh, you dorpped it?

(1;5) Mのそばでお絵かきの最中 「ペ」ン 「オ」チ「タ」。

(1;5.3) DとMとキャッチボールの最中ボールを落とし, T: /I dropped./  
M: Can you pick it up? T: [bɔ:] (ボール拾って) M: Ball.

(1;9) Tのプルオーバーが滑り落ちてしまい泣き出す朝の着替えの場面。  
M: What do you wanna do, up or down? T: [ʌʌʌʌ: p] M: Up? Oh! T: 「オ」チ「タ！」。

3.24 早く, *Go!, Go!, Quick, Quicker* —— 自分を鼓舞する時には, 英語の方を好んで使用している様子が伺える。

(1;0.9) ラッパをMに早く吹くようにせがんで, 「ア」ヤ「ク！」/Go! Go!  
Go! Go! /

(1;4.5) 一人遊びの最中, 何かおもちゃで工夫しながら, 「コ」エ 「コ」エ  
/Ah, go, go! / [kwuk] [kwuk] (Quick)

(1;4.6) /Quick/とMに早くステッカーを剥がすことをせかす。物を早く取ってほしがりせっかちに, [kwikwikwi] (quick)。自分を激励するように /Quicker/ と言いながら字を書く。

3.25 *How about?, How...?, どうだった, ~みたら* —— “How?” は “Where?” の次に産出された疑問詞であるが, “Where?” に比べその使用頻度は少ない。

(1;0.9) M: Are you still chewing? Good girl. T: /How/ [ba:]? (How

about?) M: Next, fish. You like fish, don't you? Very good.

(1; 4.4) ペンを何本か M に見せながら近寄り一本差し出ししながら, T: [pe:pe:] (Pen) M: Oh, how nice. Very nice. T: /Ah, wah, ah, ah./ もう一本差し出ししながら, /How/ [aba:] (How about this?) D: それなあに? ペン? M: ん? D: ペン? M: It's a pen. It's a pen. D は日本語で, M は英語で入力を試みているが, M にも D にも [pe: pe:] のみを産出。

(1; 5.3) “Twinkle Twinkle Little Star” を M と歌いながら両手を胸に当てて, T: /How I wonder?/ と歌う。

(1; 11) T にマイクを向けて, M: はいしゃべって。 T: 「ハ」イハイ  
ア」タ」ガバ」イバイカイカイト」チャ」ーチャイー」ア」ードージャッタ」  
(はいはいあなたがバイバイ書いたチャーチャーどうだった?)

(1; 11.8) 「“Daddy” コ」レアケテミナ」ーワ」(ダディこれ開けてみたら?)

(1; 11.9) M に, T: /How about...?/ と尋ねる。

3.26 *Look!*, 見て—— D にはやはり, 日本語の「見て」だけであるが, M と二人だけの時には, 時には “Look” を時には「見て」を使い M の注意を促す。

(1; 2.3) M にベッドの上の物を見せたがり, T: /Look!/ (“Look” に似た意味を持つ “Watch (ing)” は, (1; 0.9) に産出されている。M: This is your medicine and syrup. You're watching me very carefully, aren't you? You are very attentive. I'm very proud of you. Put some powdered calcium into it, put the cap back. Hum, it's ready. This is a lemon. This is a tomato... と本の絵を見せていくと, じっと目を凝らしていた T: [wʌtʃin:] (Watching)。別の意味での /Watch/ (Watch it!) は (3.5 参照)。

(1; 11) 一人でプラスチックの蛇で遊んでいて壊れたことを M に訴える場面。T: 「シ」ッポナイ」 「ミ」ッテ」。 M: Look for it. T: 「ミ」チュケ」タ」。  
(1; 11.4) 何かを見てもらいたい時には, D にも M にも 「ミ」テミテ」を

多発。 T:ア<sup>ミ</sup>テ ア<sup>ミ</sup>テ M: Oh, what a nice airplane! D:  
あー飛ばしてごらん。

3.27 しっぱ, Tail—— DとMと一緒におもちゃの蛇で遊んでいる場面  
では, 日英両語を産出して興じる。

(1;2.3) T:「シ<sup>ッポワ</sup> ミ<sup>チュケ</sup> タ」 M: Tail. Tail. It's a tail. T:  
/Tail/ M: Tail. T: /I got! / D:「シ<sup>ッポ</sup>」に引き続き, M:「シ<sup>ッポ</sup>」  
じゃなくて, 「シ<sup>ッポ</sup>」とTの注意を引こうとするが, 発音の違いに気付  
くのは2歳では無理のようである。(地方により発音の仕方が異なる言葉も  
あるのだということは, この時期には無理だが, 後々気付くようになる。)

3.28 蛇だ, Snake—— 上記の場合と同様に, DとMと一緒におもちゃ  
の蛇で遊んでいる場面では, 日英両語を産出し遊びに興じる。

(1;2.3) M: You love snakes, don't you? T: [snei snei snei] (snake).  
(1;11) M: Where's your underwear? Look for it. へびを見つけ,  
「ミ<sup>ツケ</sup> タ<sup>へ</sup> ビダ!」。

3.29 開けて, 開けてちょうだい, 開けてください。Open!, Open it  
please.—— Mに向かっては, 「開けて」と頼んでも願いがかなわぬ時は, 英  
語に切り替え “Open!” と大声を張り上げる。日英共に丁寧な頼み方も20ヶ  
月頃から聞かれる。丁寧な頼み方は, 日英共に20ヶ月頃に聞かれる。

(0;10.8) ドアの前に立ちMやDに, 「ア<sup>チェテ</sup>」。

(0;10.9) コーモリ傘をMに差し出し, [a:pn] (Open)。

(1;2.5) 締まった戸の前に立ち, 「ア<sup>チェテ</sup>」(開けて)。

(1;4.6) 朝戸をトントンと叩き「ア<sup>ケテ</sup>」。

(1;5.1) チーズの包みを差し出し「ア<sup>チェテ</sup>」「ア<sup>ケテ</sup>」

(1;8) ドアの前でMに向かって「ア<sup>ケテ</sup>」願いがかなわぬと英語  
でOpen! とMに向かって大声。小包を開けている場面。D:開けて。M:

Open all of it. 待ちきれずに, T:「ア」ケアケテアケ!」。

(1;9.9) M: We cannot open it yet. T: [a:pn!] と風呂場のドアの前に立ち, 早くお風呂に入りたがる。

(1;10.1) T: /Open it please./ と M に丁寧頼む。

(1;11.5) 保育園で棚のそばに立ち大きな声ではっきりと, 「セ」ンセコ」コアケテ」。

(1;11.7) 「ア」ケテクタ」一タ “Daddy” と D にやさしく頼みびんの蓋を取ってもらう。

3.30 *Thank you.*, いただきます., ありがとう。——家庭では M が食事の前に感謝の言葉を英語で言い, 日本語で「いただきます」を言ってから食べ始める事を習慣とした。その英語表現から “Thank you” を聞き取っている。

(1;2.9) M: Thank you for the food we are about to receive. と M が言い終わると, T は手を合わせ, T: [ta:ta:] (Thank you) 「イ」ター」(いただきます)。

(1;3.2) M: Did you say grace? T: 「ア」ガア」一」(ありがとう)。

(1;3.2) M: Thank you for the food we are about to receive. T: [da:da:] (Thank you.)

(1;11.9) T: 「イ」チャマ」ッテオバー」(いらっしゃいませおばあちゃん) D: ん? T: 「オ」バ」一チャン」 D: T ちゃんどうもありがとう。こないだはどうもありがとうね。T: 「ア」リ」ガト」コ」ンナ」コ」ンナ」。

M: Daddy, crab meat, please. Some more to T, Daddy, please. T: /some, Mom, [mmAm]/. M: Here you are. Thank you Daddy. T: /Thank you./

3.31 ブーブー(水の幼児語), *Water* ——保育園では, ブーブーのみを使用し, 家庭では, D との会話では日本語, M との会話では英語で水を要求している。

(1;3.2) D: あブーブーが出る。 T: 「ブ ー」。 D: あ水がでる。 T: 「ウ ン」。

(1;6.3) Mに水を欲しがり, T:[uú: uw](Water)。おかわりは, /More! More!/ と言い要求。

(1;6.9) 台所のMに, T:/More water./と “More” と “Water” が続けられるだけでなく, “Water” の発音も確かになる。

3.32 *What?*, 何? ——22ヶ月頃になるとかなり複雑な日本語の構文が聞かれ日本語の使用頻度が高まるが, Mに対しては英語も引き続き使用する。

(1;3.2) M: Here you are! Bean sprouts. Real bean sprouts. D: さば, がんもどき, 大豆。 T: 「ア ーイ」。 M: Hum? T: /What? Mine?/

(1;4.5) M: No stickers. ステッカー遊びをしたがる TにMがステッカーがおしまいになったことを告げると, T: /What?!/ と残念がる。

(1;9.9) Dと Tが何をお風呂に持って入るか話し合っている。「ア ナ ニコレ」「ナ ニ」。 What? D: Tちゃん, 舟あったよ。 T: /Yeah!/

D: どうしてないないできるんかねー (どうして隠し絵が消えないのかね)。 T: 「ナ イナ イコ コ ナ イナ イココ」(ここなくなってる) D: ん? T: 「コ コニカ イタール?」(ここには書いてある)

3.33 *Mine?*, 私の, 「ナヌノ」(自分のの意味), トモータンノ——日本語が強くなるに従い, “Mine” の使用がほとんど聞かれなくなる。日本語表現は時として異なるが, 所有格が身につけていることが伺える。

(1;3.2) T: /What? Mine?/ (条例参照)。

(1;6.9) D: ジェシカちゃんのクックね。 T: 「ウウ ー ワ タシ ノ」。

(1;7.3) M: Let me find your jacket. T: 「ナ ヌノジャケット」

(1;9.5) M: Tのよ。 T: 「ウ ン ワ タシ ノ」。

(1;11) M: That's Mommy's T: 「ナ ヌノダ」。

(1;11.8) D: ダディーのジュース。 T: 「ナ ヌノ」

(1;11.9) D: Dive, dive, dive. M: ちゃぷちゃぷよ。T: 「ト」モ「ータ  
ン」

3.34 一, 二, *One, Two, Three, Four, Five, Six, Seven, Eight, Nine, Ten*  
——保母との遊びでは掛け声の「一, 二」が主であったのに対し, 英語で  
はMとの遊びが1から10までの英語の産出を助けたものと思われる。

(1;4.4) Mの化粧箱から物を取り出しながら, T: 「イ」チ「ニ」ー。M:  
How old are you? T: /One/ 日本語でも英語でも年を聞かれると一本指  
を立てるだけの時もある。日本語の「一歳」は不出。

(1;5.2) Mと数字遊びの場面。スポンジの数字を拾いながら, T: [a:]  
(One), [u:] (two), /Two/, [ui:] (Three) [bu:] (Four) [fai] (Five) [i:]  
(Six) [dzeb] (Seven) [ei] (Eight) [ba:] (Nine??) [bai] (Ten??)

(1;5.5) Mと数字遊びをしている場面。M: That's seven. Put down the  
seven. Seven, right there. T: [dzeb] (Seven)。T: /Seven/ (一人遊び  
で数字を拾いきれいに発音する)。M: What are you up to? T: /Look  
Two, two./

(1;5.6) M: Catch. One, two. Are you ready? One, two, three! T:  
/Ball. Look./ 「コ」レハ “Two two” ヨ /Nine! /

(1;6.8) M: How many did you eat, Daddy? D: One. T: /Two, two! /  
Mと数字遊びの最中スポンジの数字を見て, T: /Nice/ [jero] (zero)。

(1;7.3) T: 「ウ」フ「ー」(とうふ) M: どうぞ。You can have it. T:  
/Two please./

(1;7.8) Mの歌う “Ten Little Indian Boys” に続けて, T: /Nine boys./  
と歌う。

(1;8.2) スポンジの数字を拾いながら, T: /Nine, One! / (2歳半頃に10  
~1まで逆に間違いなく数えられるようになる)。

(1;10.1) T: [Pɔfai] (Four, five)

(1;11.4) 靴を数えながら一人遊び, T: /One-Two-Three/ [pɔ: fai si se] /

Eight-Nine-Ten./

(1; 11.7) T: Four, Five. M: Shall I draw a butterfly? T: 「イ」チ  
ニ「一ヨ」。 M: One, two, three! T: 「イ」チニ「一」 “Three!” M: One-  
two-three! Your turn. T: /One, two, three!/ の掛け声でちょうちょを隠  
す。保育園で珍しく英語を口にする。1から10まで英語で保育に「教えて」  
あげて、誉められ目を輝かす。10以上も一生懸命発音するが聞き取れない。

(2; 0) M: How old are you? T: /Two, you know./

3.35 Hot!, あっちっち, あつい—— D, M共に「暑い, 寒い」の言い  
方も教え込もうとしているが, Tの産出は日英共に「熱い」に留まる。

(1; 4.4) MがTに食べさせている場面。スープを熱がり, T: /Hot!/  
「ア」ツチ「ア」チチ。

(1; 7.3) 餅をD, Mと食べている場面。M: あちち。 T: 「ア」チチ  
「ア」チチ。 M: Hot! Hot! Hot! D: お母さん Hot! Hot! Hot! っ。 T:  
「ア」チチ「ア」チチ。 M: Hot! Hot! Hot! これほしいって。 T: 「ア」イ。  
M: That's *mochi*, T. That's called *mochi*. T: /Ah/ D: ちょうだい?

(1; 7.4) D: これ寒い寒い。 M: Cold, cold. D: 暑い暑い寒い寒い。 M:  
Can you do, hot, hot? Hot hot hot hot hot? T: /Hot hot hot./

(1; 11.7) 保育園で給食の熱いうどんに, T: 「イ」タ「イヨ一」保育: 熱  
かった? T: 「ア」ツ「一イ」。

3.36 ターター, タイタイ(いずれも魚を意味する幼児語), Fish——熱  
帯魚や食卓にのった魚には日英両語を使うが, 空に泳ぐ鯉のぼりやおもちゃ  
の鯉のぼりには日本語のみを使用する。

(1; 4.5) DとMに水槽の魚を指して, 「タ」一「タ」一。

(1; 9) Mを水槽に誘い魚を指して, [fɪtʃ] (Fish)。

(1; 9.9) D: 金魚ちゃんどこ? M: Wah! Fish's here. T: [fɪ fɪ] (Fish)。

(1; 11.6) 保育園で飾ってあった鯉のぼりがなくなっているのに気付き,



「タ」イタ「イナ」イノ」

3.37 *Quite all right., All right!*, そうよ, いいよ —— Mとの会話で日英両語が自由自在に産出されている。

(1; 4.5) M: Is this what you're going to take to Osaka? D: ん。M: Don't forget it. T: 「コ」イコイ」(これこれ) M: Put it in your bag. D: I know. 明日の朝入れる。T: /Quite all right./

(1; 4.6) M: Hum? T: 「ソ」ーヨ」(That's right.)。M: Where did the koala go? Oh. Here it is! T: /All right!./

(1; 6.3) M: Brush Mommy's teeth, please. That's right. Good girl. T: /All right./ [a: pn] (Open.)

(1; 7.3) M: You turn the light on for me? T: 「ア」ラー「イ」ヨー」。

3.38 すぐ行く, 持って来て, 来る, おいで, 行こう, 行こうよ, *Come., Go away.* ——日本語の「行く」と「来る」の使い分けは, かなり困難な様子で, 「行く」と言うべきところを「来る」と言っている。

(1; 4.6) D: 電話かけてごらんもしもして。T: 「ス」グイク」。

(1; 6.9) D: じゃぶじゃぶじゃぶの石鹸よ。M: You said, *Mottekite?* How clever. T: 「モ」ツテキ「テ」。

(1; 7.3) M: Come. Come. T: 「“Come, come” イ」ヤ「ヨ」。M: Shall we go to the kitchen? T: 「ク」ール「ー」 M: Nice. T: 「ア」ヨガヨク「ルー」。T: Wow-wow. H: Hum. A dog is crying, wow-wow. T: 「オ」イデ」「コ」ー」「オ」イデ」。D: 行こう。T: 「イ」ツコ「ク」ール「ー」コ「ッチ」ヨー「ク」ツク「ク」チュ「コ」コ「イ」ツコ」(Let's go. Come over here. My shoes are here. Let's go.)。

(1; 11) 出掛けにDが見当たらないのでMがDを呼ぶとTも大声でDを呼ぶ。M: Daddy! Where are you? T: 「ハ」ヤクコイコイコエ「コ」イヨー！」。

(1; 11.6) テーブルの下の掘抜きにDと潜り込み, Mを「キ」テ「キ」テ」

とやさしい声で誘う。狭くて窮屈だが一緒に潜り込むとクックツと笑う。

(1;11.9) 交通信号が緑に変わる度に, M: Look both ways. Okay? 車中のMとT, リズムに乗せて, /Go go go go!/  
 (1;11.10) 電話ごっこをしているDとTの場面では, 遊びを止めてあちらに行こうよとTがDを誘っている。D: もしもしTちゃんですか。T: 「ア イ」 D: はい。お話してください。T: 「ア ミヤータ シ タコト?」 「イ ーコヨ ー」。

(2;0) Dと紙飛行機を飛ばして遊んでいたTにMが加わる。D: (飛行機) はい飛んだ。M: Tell me when it says pee-pee. D: くまさんの所へ飛んでいった。M: No, no. Don't go away! T: /Go away./ (Fly away.)

3.39 熊さん, Bear ——同一の絵本をMが日本語で読んでいる時には「クマサン」, 英語で読んでいる時には“Bear”と正しく使い分けしている。

(1;5.2) 熊の絵本を見ながら「ク マサン」とMに示す。

(1;5.3) Tの絵を見て, M: It looks like a person. T: [be:] [be:] [bebe] (Bear) と反論。

3.40 ブーブー (幼児語), Car, Beep! Beep! ——自分が乗って行く車は「ブーブー」で, それ以外の車は“Car”と狭義の意味で使い分けをしているかのようでもあるが, そう言い切るためにはデータが十分ではない。

(1;5.2) D: 乗っていく? 自動車乗っていく? T: 「ン ブ ーブ ー」。  
 D: ブーブーいいね。T: 「ブ ーブ ーワ」((乗って行く)自動車はどこ?)

(1;6.7) 散歩中路上の車を指し, Mに T: /Car car./ と知らせる。

(1;9.8) Dとお風呂でおもちゃの自動車と遊びながら, 「“Car car” ネネ」。

(1;11.4) 自動車も自転車も /Beep! Beep!/. おもちゃの乗り物にまたがり /Beep! Beep!/. とか /Ting-a ring!/. と言い遊ぶ。

3.41 *You*, あなた——日本語の「あなた」はこの時以外ほとんど産出して  
いない。人からも「あなた」と呼ばれるのを嫌う。

(1;5.2) D: あそこ行って見てごらん。 M: Look at yourself in the  
mirror. T: /Ah ah ah ah??/ M: Hum? T: /I, you./ と不思議な様子。

(1;5.5) Mと数字遊びをしている場面。 M: That's seven. Put down the  
seven. T: /You do!/

(1;11.10) M& T: (チューリップの花 (日本語) を歌う) M: Very good, T.  
Clap your hands, Daddy. Very good. T: Dに向かい, 「ア ナタウ ー」  
(あなたも歌って)。 M: Yeah, you sing this time, Daddy.

3.42 *Ball*, ボール——遊びの相手がMだけの時には英語の発音で、相  
手かDだけの時には日本語で発音し、両者がいる時には日英両語を使いな  
がら遊びに興じる。

(1;5.6) T: /Ball/ M: Ball? All right. Throw me the ball.

(1;11.8) D: 野球。 T: 「ヤ クー ヤ キューボール ナ ーガ」 (野球  
のボール投げて)。

(1;11.9) 水泳でボール投げをしたことを, T: 「ボ ールポイ」とDに話  
す。

3.43 *Horse*, パカパカ (幼児語)——馬乗りの遊びの馬と絵本に出てくる  
馬を使い分けている様子である。

(1;6.3) Mが読み聞かせる *Brown Bear* を聞きながら, Mがその言葉を  
発音する直前に, T: [hɔ:] (Horse)。

(1;11.7) Dにまたがり, T: 「パ カパカ」と言いながら馬乗りを楽しむ。  
竹製の木馬に乗って遊ぶ時も, 「パ カパカ」。

3.43 クック (幼児語), くつ, *Shoes*——遊びに加わったDも英語で話  
し始めると, Tは上機嫌で英語が次々に飛び出す。

(1;6.9) 友達からもらった大きな靴をはいて遊んでいる場面。M:クッククック。You have shoes. クック。Give them to me. T:「ク<sup>ー</sup>ック？」  
M:Hum. T:「ク<sup>ー</sup>ック」 M:クック。That's right. Jessica gave them to you. D:“Jessica's shoes” ね。T:/Jessica's big shoes./ M:How clever! Yes, Jessica's big shoes.

(1;11.4) Mの運転する車中で、時には英語、時には日本語のイントネーションで独り言のおしゃべり。英語の独り言に/Shoe/(複数形の産出はない)、日本語の独り言には「ク<sup>ー</sup>ツ」が産出されている。

3.45 Ear, 耳——体の部分ではMは“Eye(s)”同様に“Ear(s)”を度々使用し Tに聞かせていたが、「ミ<sup>ー</sup>ミ」の発音は両唇音で易しいはずだが、産出は意外と遅い。

(1;6.9) Mと体の部分の言い当てごっこ。頭を指して、T:[je:] (Head) /Ear/ [i: jəjə] (Pull your ears?? と聞こえるイントネーションでMに耳を引っ張るように指示する (3.8参照)。

(1;7.5) D:お話してちょうだいね。お話してちょうだい。T:「ウ<sup>ー</sup>ワ<sup>ー</sup>」  
D:ん? T:「ア<sup>ー</sup>イ」 D:ん? T:「イ<sup>ー</sup>エ<sup>ー</sup>ア<sup>ー</sup>」 D:耳は? T:  
「ミ<sup>ー</sup>ミ<sup>ー</sup>」 D:ん? T:「ア<sup>ー</sup>チ<sup>プ</sup>チ<sup>ミ</sup>ミ<sup>ー</sup>タ<sup>ー</sup>ター」 D:はい。

3.46 取れた Broken, Broke——取れたは、外れた、壊れたの意味でも使用する。

(1;7.3) M: Mommy's putting your hair up. T:「ウ<sup>ー</sup>コ<sup>ー</sup>エチャ<sup>ト</sup>エ<sup>タ</sup>」。おもちゃの蛇の外れたしっぽをMに差し出す。

(1;11.4) DとMのそばでおもちゃの蛇で遊んでいたT, Mに向かい、T:/Head broken./ と言ってから、「シ<sup>ッ</sup>ポ<sup>コ</sup>レ<sup>ヨ</sup>ト<sup>レ</sup>タヨ」。

(1;11.8) T: The black snake broke. M: Daddy will fix it for you.  
D: I'll fix it. T: /Fix./

3.47 かきくけこ、あいうえお、きゃきゅ、QRST, ABC, OP, WXYZ——  
Tを抱き鏡の前で見えやすい姿勢ではっきりと発音するMの口元をじっと  
見ているうちに“ABC”や「あいうえお」が上手に言えるようになる。

(1;7.5) D:かきくけこ。 T:「カッカカッカココ カキクケコ」。

(1;8.2) 一人遊びの間の独り言。 T:「アイエオキャキュエオ」。

(1;9.9) M:ABC (歌)... T:/QRST/ (自慢して繰り返しMに聞かせる。)

M:Wow, great!

(1;11.8) 独り言を盛んに言いながら一人遊びをする。 T:「アイウエオ」,  
/ABC...//OP, WXYZ/。

3.48 無い, *Gone!*—— Mとの遊びでは、日英両語共に知っている言葉を  
多発し遊びに夢中になる。

(1;7.8) Mと食事中、自分のお皿の物を食べてしまう度に「ナ イ ナ イ  
ナ イ ナ イ ナ ーイ」を繰り返しお代わりをせがむ。

(1;11) おもちゃの蛇の尾が取れたのをDに見せ、 T:「シ ッポナイ」。

(1;11.7) Mと Tが隠し絵遊びをしている場面。 M:One, two, three! Your  
turn. T:One, two, three! M:It's gone! T:「ナ ーイ」 M:It's gone!  
T:「シ ット ー」/Gone!/ (消えちゃった!の意味) 絵が再び現れるの  
を見て「コ コダ ー!」。

3.49 うんこ, *Poo*—— 一人遊びができる時間が長くなったり、自力で  
ベッドから降りられたりできるようになるに従って、トイレを知らせるこ  
ともできるようになる。

(1;8.1) 保母に「ウ ンコ」と言い知らせる。

(1;10.8) 家ではMに、/Poo/ (Poop) と言い知らせる。

3.50 足, *Foot*—— Mと足をくすぐり合う遊びでも日英両語が聞かれる。

(1;9.9) MがTの足をくすぐる。 T:「ア ッチ」(足)「コ エ ッテ

コ [エ] ッテ コ [エツ] M: Tickle tickle, tickle, right foot, tickle, tickle.  
T: /Tickle, tickle, tickle/ 「コ [一ヨ]」。

3.51 Baa, めー (羊とやぎの鳴き声) —— Dが休日ごとに Tを動物園に連れて行ったり、トーキーカードで動物の鳴き声を聞いて遊んだりしているうちに、動物の絵を見るとその鳴き声をしてMやDの注意を引くようになる。

(1;11) 絵画展でMを羊の絵の前に引っぱって行き、/Baa! Baa!/. D: やぎは何て鳴くの? T: 「メ [一] メ [一]」。

3.52 知ってる, *I know that!* —— Dには普通日本語で応答するが、発話に強い意味を持たせたい時には、英語に切り替える方略も使う。

(1;11.7) MとTの隠し絵遊びの場面。M: It's gone! T: 「シ [ット] [一]」。

(1;11.8) 隣の子供が外で遊んでいるのを聞きつけて、D: あっちゃんよ。あっちゃんよ。とTに呼びかけるが、一人遊びに夢中のTはうるさがり、T: /I know that!/

3.53 二歳, *Two* —— 「何歳?」という言い方で年齢を聞かれると適切に答えるが、稀にしか使われない「いくつ?」で質問されると戸惑う。

(2;0) D: 何歳? T: 「二 [シャイ]」 (黙って2本指を出す時もある) 続いて、M: How old are you? に対しては知っているのと言った気持ちを表して、T: /Two, you know./

#### 4. 一繋ぎの表現に見られるコードの切り替え

Tの録音テープを何回も丹念に聞き返し、日英両語を混ぜる種類のコードの切り替え (Intra-sentential code-switching) はすべて抽出し次に掲げる。発話が一気に行われる一繋ぎりの表現の中での日英の切り替えは、Tの場合非常に少ない。日本語の助詞を英語表現の中で使用する場合と、日本

語の言葉の代わりに英語を日本文の中で使用する場合は主である。

(1;3.2) M: May I have the fruit please. T: 「[tu:tu: (fruit)]” は」とあたりを見回してから、/Here you are./ と果物を M に渡す。

(1;7.3) M: Change your diaper. It's dirty. T: 「[nápɪ] (diaper)”  
イ ヤ ー ジャ ヨ」。

(1;9) M と日本語の歌、「ポッポ」を歌っている場面。「“Monkey” が」。

(1;9.8) D とお風呂でおもちゃの自動車遊びの最中。「“car car” ね」。

(1;11.4) D と M との食事場面。D: Crab meat? M: Crab, Crab is delicious. T: [krækræ] 殻から中身を引き出す D に向かい、「[kræ]”  
チ ヨダ イヨ」。

(1;11.4) M: Come. Come. T: 「“Come, come” イ ヤ ヨ」。

(1;11.7) M: Shall I draw Non-tan? T: 「メー “No” ネ」(目は書かないで)。上紙を持ち上げると描いた絵が消える遊びを M と T がしている場面で。M: One, two, three! 掛け声と共に上紙を持ち揚げる。T も同様に、「イ チ ニ ー “Three”!」。

(話している言語に関係なく、D を呼ぶ時には、“Daddy” を、M には “Mommy” を多用している。「“Daddy” ノ」(おとうさんの) がその例であるが、この種の用法はコードの切り替えの総計に加えていない。詳しくは 3.9 を参照)。

## 5. ま と め

以上、同時バイリンガル児 (T) により日常生活を通して産出された発話のうち、特に同義語に焦点を当て分析を行った。その結果、喃語期を過ぎて、言葉らしい言葉が発話されるようになった時点 (0;8.9) から同義語の産出があり、2 語発話が増す 2 歳時までの 20 ヶ月間を通して数多く検出された。しかも、年齢とともに言語の習得力が増し、発話の量が増加するにつれ同義語も多彩になっている。T の場合は、両言語をミックスする産出例は非常に少なく、しかも、その度合いは、両言語の言語能力が伸

びるにつれて増していることも明らかになった(4参照)。この点に関しては、3、4歳時の縦断研究を通して追跡していくことにするが、いずれにせよ、両言語のミックス率は、成長につれて減少するという Volterra & Taeschner の主張とは逆の結果が、この時点では認められる。

また、同義語は無秩序に産出されているのではなく、相手が誰かによって巧みに使い分けがなされていることも、本研究から分かる。例えば、同義語のうち英語は、主に英語で話すMに対してであり、日本語で話すDに対しては、ある特別の目的・もくろみがある時が主である。このコミュニケーションストラテジー及びコードの切り替えの機能に関する分析は、他の機会に譲るが、コードの切り替えは、言語の混乱を意味するものではなく、それにより、言語表現がむしろより豊かなものになっていることを、ここで強調しておきたい。複数言語の同時習得は混乱を引き起こすものではなく、むしろ相乗効果により両言語のリテラシーの発達に好ましい影響のあることはすでに発表した通りである (奥田, 1996)。

#### 参 考 文 献

- Auer, J. C. P. (1988), "A conversation analytic approach to code switching and transfer," pp. 187-213, in M. Heller (Ed.) *Code switching: Anthropological and Socio-linguistic Perspectives*, Mouton de Gruyter.
- Bhatia, T. & W. Richie (1989), "Introduction: current issues in 'mixing' and 'switching'," *World Languages*, Vol. 8, No. 3, pp. 261-264, Pergamon Press.
- Bokamba, E. (1989), "Are there syntactic theory: evidence for emerging grammar," *World Languages*, Vol. 8, No. 3, pp. 265-276, Pergamon Press.
- Cheng, L. & K. Butler (1989), "Code-switching: a natural phenomenon vs language 'deficiency'," *World Languages*, Vol. 8, No. 3, 277-292, Pergamon Press.
- De Houwer, A. (1990), *The acquisition of two languages from birth: a case study*, Cambridge University Press.
- De Houwer, A. (1995), "Bilingual Language Acquisition," pp. 219-250, In Fletcher, P. & B. MacWhinney (Eds.) *The Handbook of Child Language*, Basil Blackwell Ltd.
- Fantini, A. (1978), "Bilingual behavior and social cues: case study of a bilingual



- child,” in M. Paradis (Ed.), *Aspects of Bilingualism*, 283–301, Hornbeam Press.
- Genesee, F. (1987), *Learning Through Two Languages: Studies of Immersion and Bilingual Education*, Heinle & Heinle Publishers.
- , (1988), “Bilingual language development in preschool children,” pp. 62–79, in Bishop, D. & K. Mogford (Eds.) *Language Development in Exceptional Circumstances*, Churchil Livingstone.
- Genesee, F. & R. Bourhis (1988), “Evaluative Reactions to Language Choice Strategies: The Role of Sociostructural Factors,” *Language and Communication*, Vol. 8, No. 3/4. pp. 229–250, Pergamon Press.
- Genesee, F. (1989), “Early bilingual development: one language or two?” *Journal of Child Language* 16, pp. 161–179, Cambridge Univ. Press.
- Genesee, F., E. Nicoladis & J. Paradis (1995), “Language differentiation in early bilingual development,” *Journal of Child Language* 22, pp. 611–631, Cambridge Univ. Press.
- Goodz, N. (1989), “Parental Language Mixing in Bilingual Families,” *Infant Mental Health Journal*, Vol. 10, No. 1, pp. 25–44, Michigan Association.
- Gumperz, J. J. (1982), “Conversational code switching,” pp. 59–99 in *Discourse strategies*, Cambridge Univ. Press.
- Halmari, H. & W. Smith (1994), “Code switching and register shift: Evidence from Finish English child bilingual conversation,” *Journal of Pragmatics* 21, pp. 427–445, Pergamon Press.
- Hamers, J. & M. Blanc (1983), *Bilinguality & Bilingualism*, Cambridge Univ. Press.
- Heller, Monica (Ed.) (1988), *Codeswitching, Anthropological and Sociolinguistic Perspectives*, Mouton.
- Hirsh Pasek, K. & R. M. Golinkoff (1996), *The Origins of Grammar: Evidence from Early Language Comprehension*, The MIT Press.
- Klausen, T., Subritzky, M. & Hayashi, M. (1992), Initial production of inflections in bilingual children. In G. Turner & Messer (Eds.), *Critical Aspects of Language Acquisition and Development*, London: Macmillan.
- Kwan-Terry, A. (1992), “Code switching and code mixing: the case of a child learning English and Chinese simultaneously,” *Journal of Multilingual and Multicultural Development* 13.3, pp. 243–259, Multilingual Matters.
- Lindholm, K. J. & A. M. Padilla (1978), “Language mixing in bilingual children,” *Journal of Child Language* 5, pp. 327–335, Cambridge Univ. Press.
- Locke, J. L. (1993), *The Child’s Path to Spoken Lanugage*, Harvard Univ. Press.
- McClure, E. (1977). “Aspects of code switching in the discourse of bilingual Mexi-

- can American children,” in M. Saville Troike (Ed.), *Linguistics and Anthropology, Georgetown University Round Table on Languages and Linguistics*, pp. 93–115, George University Press.
- Mclaughlin, M. (1984), *Second Language Acquisition in Childhood: Vol.1. Preschool Children* (2nd Ed.), Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Mehler, J., Bertonicini, J., M. Barriere & D. Jassik-Gerschenfeld, (1978), “Infant Cognitions of mother’s voice,” *Percetion* 7, pp. 491–497.
- Meisel, J. M. (1989), “Early differentiation of languages in bilingual children,” in Hylternstam, K. & L. K. Obler (Eds.), *Bilingualism across the lifespan: aspects of acquisition, maturity and loss*, pp. 13–40, Cambridge Univ. Press.
- Meisel, J. M. (Ed.) (1994), *Bilingual First Language Acquisition: French and German grammatical development*, John Benjamins Publishing Co.
- Meisel, J. M., H. Clahsen & M. Pienemann (1981), “On determining developmental stages in natural second language acquisition,” *Studies in Second Language Acquisition*, 3.2, pp. 109–135,
- Mikes, M. (1990), “Some issues of lexical development in early bi-and trilinguals,” in Conti Ramsden, G. & C. E. Snow (Eds.), *Children’s Language*, Vol. 7. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Milroy, L. & P. Muysken (Eds.) (1995), *One speaker, two languages cross disciplinary perspectives on code switching*, Cambridge Univ. Press.
- Myers-Scotton, C. (1993), *Duelling Languages Grammatical Structure in Codeswitching*, Clarendon Press.
- Myers-Scotton, C. (1993a), *Social Motivations for Code switching: Evidence from Africa*, Oxford Univ. Press.
- Myers-Scotton, C. (1993b), *Duelling Languages: Grammatical Structure in Codeswitching*, Clarendon Press. Oxford.
- Nishimura, M. (1989), “The Topic-comment construction in Japanese-English code-mixing,” *World Languages*, Vol. 8, No. 3, pp. 365–364, Pergamon Press.
- Nishimura, M. (1995a), “Varietal Conditioning in Japanese/English Code Switching,” *Language Sciences* 17.2, pp. 123–145, Elsevier Science Ltd.
- Nishimura, M. (1995b), “A functional analysis of Japanese/English code switching,” *Journal of Pragmatics* 23, pp. 157–181, Pergamon Press.
- Ochs, E. & B. Schiefflin (1995), “The Impact of Language Socialization on Grammatical Development,” Fletcher, P. & B. MacWhinney (Eds.), *The Handbook of Child Language*, pp. 73–94, Basil Blackwell Inc.
- Okuda, H. & K. Okuda (1993), “The Development of a Student Centered Curricu-

- lum for Beginners in JSL/JFL,” *Hiroshima Shudo University Research Review*, pp. 43–59, Hiroshima Shudo University.
- Okuda, H. (1996), “Awakening to Literacy: A Child-Centered and Meaning Centered-Approach to Bilingual Language Development,” *Studies in the Humanities and Sciences*, Vol. 37, No. 2, pp. 203–242, Hiroshima Shudo University.
- Pearson, B., S. Fernandez & D. Oller (1995), “Cross language synonyms in the lexicon of bilingual infants: one language or two?” *Journal of Child Language* 22, pp. 345–368, Cambridge Univ. Press.
- Perera, K., G. Collis & B. Richards (Eds.) (1994), *Growing points in child language*, Cambridge Univ. Press.
- Poplack, S. (1980), “Sometimes, I’ll start a sentence in Spanishy termino en Espanol: toward a typology of code switching,” *Linguistics* 18, pp. 518–618.
- Poplack, S. & M. Meechan (1995), “Patterns of language mixture: nominal structure in Wolof-French and Fongbe French bilingual discourse,” Milroy, L & P. Muysken (eds.), *One speaker two languages*, pp. 199–232, Cambridge Univ.
- Pye, C. (1986), “One lexicon or two?: an alternative interpretation of early bilingual speech,” *Journal of Child Language* 13, pp. 591–593, Cambridge Univ. Press.
- Quay, S. (1995), “The bilingual lexicon: implications for studies of language choice,” *Journal of Child Language* 22, pp. 369–387, Cambridge Univ. Press.
- Redlinger, W. E. & T. Z. Park (1980), “Language mixing in young bilinguals,” *Journal of Child Language* 7, pp. 337–352, Cambridge Univ. Press.
- Romaine, S. (1989), *Bilingualism*, pp. 166–212, Blackwell.
- Rondal, J. A. (1980), “Fathers’ and Mothers’ speech in early language development,” *Journal of Child Language* 7, pp. 353–369, Cambridge Univ. Press.
- Sachs, J. & J. Devin (1988), “Young Children’s Use of Age Appropriate Speech Styles in Social Interaction and Role Playing,” pp. 216–229, in Franklin M. B. & S. S. Barten (Eds.) *Child Language: A Reader*, Oxford Univ. Press.
- Sankoff, G. (1972), “Language use in multilingual societies: Some alternative approaches,” in J. B. Pride & J. Holmes (Eds.), *Sociolinguistics*, pp. 35–51, Hamondsworth, Penguin.
- Saunders, G. (1988), *Bilingual Children: From Birth to Teens*, Multilingual Matters.
- Scotton, C. M. (1988), “Code switching as indexical of social negotiations,” pp. 151–186, in M. Heller (Ed.) *Codeswitching*, Mouton de Gruyter.
- Stockmal, V., D. Muljani & Z. Bond (1994), “Can children identify samples of foreign languages as same or different?” *Language Sciences*, 16.2, pp. 237–252, Elsevier Sciences.

- Taeschner, T. (1983), *The sun is feminine: a study on language acquisition in bilingual children*, Berlin: Springer Verlag.
- Taeschner, T. (1991), *A Developmental Psycholinguistic Approach to Second Language Teaching*, Ablex Pub.Co.
- Tay, M. W. (1989), "Code switching and code mixing as a communicative strategy in multilingual discourse," *World Languages*, Vol. 8, No. 3, pp. 407-418, Pergamon Press.
- Trehub, S. (1973), *Auditory linguistic sensitivity in infants*, Ph. D. dissertation, McGill University, Montreal.
- Vihman, M. (1981), "Phonology and the development of the lexicon: evidence from children's errors," *Journal of Child Language* 8, pp. 239-264.
- Vihman, M. (1982), "The acquisition of morphology by a bilingual child: a whole word approach," *Applied Psycholinguistics* 3, pp. 141-160.
- \_\_\_\_\_, (1985), "Language differentiation by the bilingual infant," *Journal of Child Language* 12, pp. 297-324, Cambridge Univ. Press.
- Volterra, V. & T. Taeschner (1978), "The acquisition and development of language by bilingual children," *Journal of Child Language* 5, pp. 311-326, Cambridge Univ. press.
- Wei, L. & L. Milroy (1995), "Conversational code switching in a Chinese community in Britain: a sequential analysis," *Journal of Pragmatics* 23, pp. 281-299, Pergamon Press.
- Yoon, K. K. (1996), "A case study of fluent Korean English bilingual speakers: group membership and code choices," *Journal of Pragmatics* 25, pp. 395-407, Pergamon Press.
- Youssef, V. (1991), "Can I put I want a slippers to put on": young children's development of request forms in a code switching environment," *Journal of Child Language*, 18, pp. 609-624, Cambridge Univ, Press.

## Summary

### Code-switching and cross-language equivalents: Evidence for language differentiation by a Japanese-English Bilingual Infant

Hisako Okuda

Recently, with the increased popularity of international economic and cultural exchanges in Japan, the number of Japanese children living overseas and foreign children living in Japan has increased dramatically. Also families living in monolingual situations have recognized the importance of English and wish for their children to begin learning English at an early age. Consequently, the issue of bilingual education cannot be avoided even in Japan. This is an age in which a child's native language and culture should be taken into consideration when teaching Japanese as a foreign language, as well as a time for re-evaluating effective methods of achieving bilingualism. However, research in this area in Japan is extremely limited.

In attempting to understand and clarify bilingual children's learning processes, the author has undertaken an ongoing account of her efforts to raise a bilingual child (T) in Japan. This paper, in response to the interest in previous papers, she concentrates on: (1) by analyzing the corpus accumulated from T during the period of one-word utterances (0;8.9–2;0), providing concrete evidence of English-Japanese equivalents in relation to the sociolinguistic contexts and (2) as an implication of the firm base, supporting the claim that bilingual infants do have the ability to differentiate between two languages.

This research was supported by a 1995 Grant-in-Aid for Exploratory Research from the Ministry of Education, Japan.